

(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第17輯

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う

# 脇 浜 遺 跡 II

—— 発掘調査報告書 ——

1 9 8 8

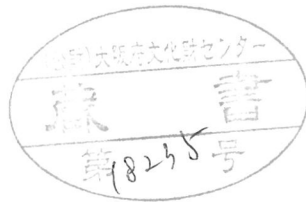
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第17輯

都市計画道路貝塚中央線建設に伴う

# 脇 浜 遺 跡 II

—— 発掘調査報告書 ——



1 9 8 8

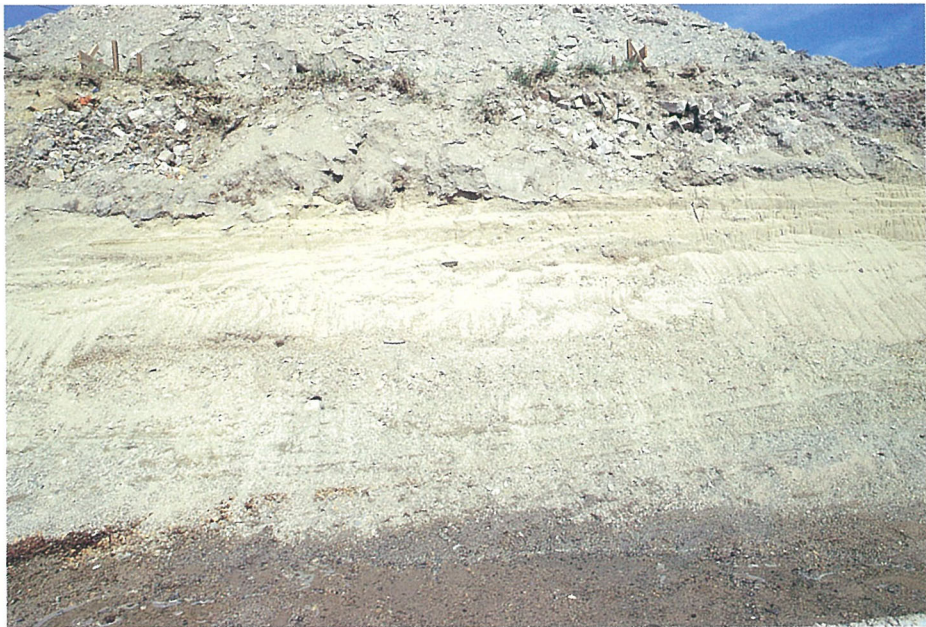
財団法人 大阪府埋蔵文化財協会



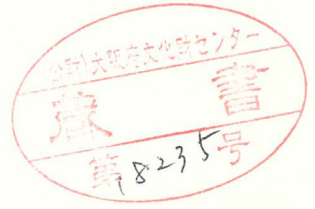
(南東から)



IV-1 区南西壁断面



IV-2 区北東壁断面



## 序 文

都市計画道路貝塚・中央線は、近畿自動車道と歌山線と阪神高速道路大阪湾岸を結ぶ幹線道路として計画され、泉州方面（貝塚市内を縦貫する道路）の主要道路として関西国際空港のアクセス道路として位置づけられまして、部分的な開通から全線の早期供用開始が急がれている道路であります。

本道路は、貝塚市の南部に位置し、近木川流域の谷筋にあたり貝塚市内を縦断し、近畿自動車道と歌山線の貝塚IC並びに国道170号（外環状線）に連絡する予定であります。道路予定地周辺には、泉州方面では古くから有名な水間観音や古い町並みが所在しておりまして、貝塚市内の主要な地域近くを通過することになっています。

本道路予定地の調査は、昭和50年後半の早い時期から大阪府教育委員会が発掘調査を手掛けられていたが、関西国際空港建設に伴い空港関連事業として位置づけられたので当協会が昭和60年度から調査を行なったものであります。

発掘調査は、大阪府教育委員会より調査指示を受けて、協会が大阪府岸和田土木事務所と委託契約を締結し調査を実施したものであります。

今回報告する協浜遺跡は、昭和60年度から当協会が発掘調査を実施し、昭和62年度末で4次を数えることになりました。

調査の結果、その詳細な説明は本報告書に記載いたしましたが、古墳時代の集落跡を中心とした遺構を多く検出することができました。なかでも古墳時代の製塩土器片が多量に出土し周辺に製塩炉が所在していることを推定することができます。また本遺跡が海岸線に沿って所在するのと近木川の河口にあたるため、複雑な堆積地層を検出することができ、地質学の方面にも貴重な資料の提供ができたものと考えております。その他の数多く遺構・遺物を検出しております。

本発掘調査を実施するにあたり、大阪府教育委員会、大阪府土木部、大阪府岸和田土木事務所、貝塚市教育委員会、その他地元関係者の皆様に多大なるご協力、ご支援を賜り、深く感謝いたします。

また、今後の当協会の調査等にご指導を賜りますようお願い申し上げます。

昭和63年3月

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

理事長 浅野素雄

## 例 言

(1) 本書は都市計画道路貝塚中央線建設予定地内に所在する貝塚市脇浜遺跡1986(昭和61)年度・1987(昭和62)年度の発掘調査報告書である。あわせて1986年度に実施した阪神高速道路湾岸線建設予定地内での試掘調査結果も掲載している。

(2) 調査は大阪府土木部岸和田土木事務所の委託を受け、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、(財)大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

(3) 調査は(財)大阪府埋蔵文化財協会調査課(課長 井藤徹)がおこなった。

各年度の調査担当者は以下の通りである。

1986年度 調査課第2班(班長藤田憲司)技師禰冨田佳男、蜂屋晴美、趙哲済

1987年度 調査課第4班(班長岩崎二郎)技師岡本圭司

(4) 調査は1986年度が4月1日から翌3月31日まで、1987年度が9月1日から10月31日までである。

(5) 調査の実施にあたっては大阪府土木部岸和田土木事務所、阪神高速道路公団、貝塚市教育委員会及び、地元関係各位の協力を得た。

(6) 調査及び報告書の作成にあたっては、大阪府教育委員会文化財保護課のほか、豊田兼典(大阪府科学教育センター)、西岡 巖・池田 毅・前川浩一(貝塚市教育委員会)の各氏からご指導、ご教示を得た。記して感謝したい。

(7) 本遺跡では、花粉分析、珪藻分析、火山灰分析、並びにポーリング調査を実施した。結果の一部は付論として収録した。

(8) 調査は、国土座標第Ⅶ系を基に区画を設定して行った。区画の方法、呼称については、第Ⅲ章第1節に示した。図中の方位は座標北を表し、標高はT.P.で表した。

(9) 遺構写真撮影は調査各担当者が行い、遺物写真は小倉勝が行った。

(10) 図版に使用した航空写真は貝塚市の許可を得て転載した。

(11) 本書で記載した地層の色は小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖 第5版』(1976年9月)によった。

(11) 本書の執筆は目次に示す通りで、編集は禰冨田が担当した。

(12) 本調査に当たっては、写真、実測図などの記録資料、並びにカラースライドを多数作成した。広く利用されたい。

## 本文目次

第I章	調査に至る経過	(岡本)	1
第II章	環境		2
第1節	地理的環境	(趙・禰冨田)	2
第2節	歴史的環境	(禰冨田)	2
第III章	調査の成果		8
第1節	調査の方法と経過	(岡本)	8
第2節	層序	(禰冨田・岡本・趙)	9
第3節	出土遺物	(禰冨田)	16
第4節	試掘調査地点の調査結果	(禰冨田・趙)	24
第IV章	まとめ		26
	地形変遷について	(禰冨田・岡本・趙・藤田)	26
	蛸壺形土器について	(禰冨田)	27
付論			33
	はじめに	(藤田)	33
	1. 脇浜遺跡花粉・珪藻・火山灰分析報告	(川崎地質株式会社)	35
	2. 脇浜遺跡試錐地質調査中間報告	(川崎地質株式会社)	42

## 挿図目次

第1図	脇浜遺跡周辺地形図	3
第2図	泉州地方海浜部の遺跡分布図	4
第3図	調査区周辺図	8
第4図	IV-1区地区割図	9
第5図	古墳時代土器地区別出土破片数分布図	10
第6図	(1)断面模式図及び(2)IV-1区北東壁断面図	11~12
第7図	中・近世土器地区別出土破片数分布図	13
第8図	IV-2区北東壁断面図	14
第9図	出土遺物実測図(1)	16
第10図	出土遺物実測図(2)	17

第11図	出土遺物実測図（3）	19
第12図	出土遺物実測図（4）	21
第13図	出土遺物実測図（5）	22
第14図	出土遺物実測図（6）	23
第15図	北西壁断面図	24
第16図	沢海岸遺跡遠景	25
第17図	脇浜遺跡出土の蛸壺形土器	27
第18図	土器傾き比較図	29
第19図	花粉・珪藻・火山灰分析試料採取位置図	33
第20図	分析試料採取層位図	34
第21図	脇浜遺跡Ⅳ-1区花粉ダイアグラム	39
第22図	脇浜遺跡試掘調査地点花粉ダイアグラム	40
第23図	脇浜遺跡試掘調査地点珪藻ダイアグラム	41
第24図	地質断面図	48

## 表 目 次

第1表	泉州地方海浜部の遺跡一覧表	5～6
第2表	飯蛸壺法量グラフ	28
第3表	全鉍物組成	37
第4表	重鉍物組成	37
第5表	ボーリング調査の標高・座標と掘削深度	42
第6表	No. 3を代表とする調査地域の岩相層序	47

## 図 版 目 次

巻頭図版一	脇浜遺跡近景	図版五	Ⅳ-2区 全景・出土遺物
巻頭図版二	断面	図版六	Ⅳ-1区 出土遺物（1）
図版一	脇浜遺跡周辺空中写真	図版七	Ⅳ-1区 出土遺物（2）
図版二	Ⅳ-1区 断面	図版八	Ⅳ-1区 出土遺物（3）
図版三	Ⅳ-1区 遺物出土状態	図版九	Ⅳ-1区 出土遺物（4）
図版四	試掘調査地点 近景・断面		



## 第 I 章 調査に至る経過

脇浜遺跡は貝塚市脇浜一丁目から三丁目を中心に広がる遺跡である。

本遺跡の調査は、都市計画道路貝塚中央線の建設に先立つものである。

その貝塚中央線地域内の発掘調査は、国道26号線(第二阪和国道)から府道堺阪南線(旧国道26号線)の間の部分については、1975年に(財)大阪文化財センターが脇浜、畠中、石才近義堂の三遺跡の試掘調査で先べんをつけている。この調査で、脇浜遺跡からは、弥生時代から中・近世までの遺物が出土し、中世の遺構を検出している。また、大阪府教育委員会では、この調査結果を受け、1977年に加神地域の調査をおこなっており平安時代前半の掘立柱建物跡を数棟検出している。その後、この予定路線内で、1979年度から1980年度にかけて、再度、(財)大阪文化財センターにおいて詳細な試掘調査がおこなわれ、その調査結果を受け、1981年度に大阪府教育委員会が、コモ池周辺にて畠中遺跡を発掘調査し、掘立柱建物跡を数棟検出した。なお、当協会もその隣接地を調査し、掘立柱建物跡群が平安時代を中心とすることと、他に6世紀後半の竪穴住居址群の存在を明らかにしている。

一方調査の残っていた府道堺阪南線から以西の脇浜遺跡については1985年から1986年にかけて当協会が発掘調査を実施した。この調査では、製塩土器、蛸壺形土器等の古墳時代の漁撈具の他、旧石器時代から近世に至る各種の遺物が出土した。また、古墳時代、中世の柱穴群の他、各時代の砂堆・自然流路が検出され、海浜部の陸地化の進展の一端を見出すことができた。

この時の調査で、調査区の北西部にある市道と三味川に挟まれた地区(Ⅳ区)については、湧水の著しいことが予想されたため、10m四方に鋼矢板を打ち込み試掘調査をおこなった。その結果、蛸壺形土器等、若干の遺物の出土が見られたため、この部分の調査は1986年度以降にまわすこととなった。

こうした1985年度の調査成果をふまえて大阪府教育委員会文化財保護課と大阪府土木部交通政策課との間で協議がおこなわれた。これを受けて、当協会と大阪府土木部岸和田土木事務所はⅣ-1区の調査について1986年4月1日に調査委託契約を結び、同年7月15日から現地調査に着手した。同じくⅣ-2区についても1987年9月1日に調査委託契約を結び、同年9月16日より現地調査に着手した。

## 第II章 環 境

### 第1節 地理的環境

脇浜遺跡は貝塚市の西部に位置し、その南には、和泉山脈に源を發し、水間を経て大阪湾に流入する近木川<sup>(1)</sup>が、東南東—西北西方向に流れ下っている(第1図)。

本遺跡は、2つの地形面にまたがって分布している。ひとつは中位段丘堆積層が構成する中位段丘面<sup>(1)</sup>であり、もうひとつは、海浜部の沖積面である。

中位段丘面は本遺跡で標高T.P.+10mあり、近木川との比高は約4mである。段丘面の平均勾配は2.8/100前後であり、近木川方向にそって水間付近まで分布する。

この段丘面上には傾斜方向にそって数条の浅い谷地形が刻まれており、溜池や水田等に利用されている。畠中遺跡<sup>(2)</sup>は、このような谷地形のひとつにあたっており、遺跡の基底面を構成する地層からは、寒冷な気候を示すトウヒ属の毬果が出土している。

一般に、中位段丘堆積層はリス・ウルム氷期に形成されたと考えられているので、その堆積面上にあるこれらの谷地形は、ウルム氷期に開析されたものであろうと推測される。

一方、海浜部の沖積面は、海岸線にそって約400mの幅で細長く分布する。標高はT.P.+4m以下で小規模の起伏がある。後述するように、この沖積面は縄文時代以降に形成された沖積層からなる。また、段丘崖は6m前後の高さがあり、近隣地域の中では極めて残りが良い。縄文海進期の波食崖であると考えられている<sup>(3)</sup>。

本報告書の調査は、主として海浜部の沖積面で実施された。なお、第1図の海岸線は、調査前には存在したが、その後、埋め立てが進んだために、現在では防波堤がその名残をとどめているだけである。

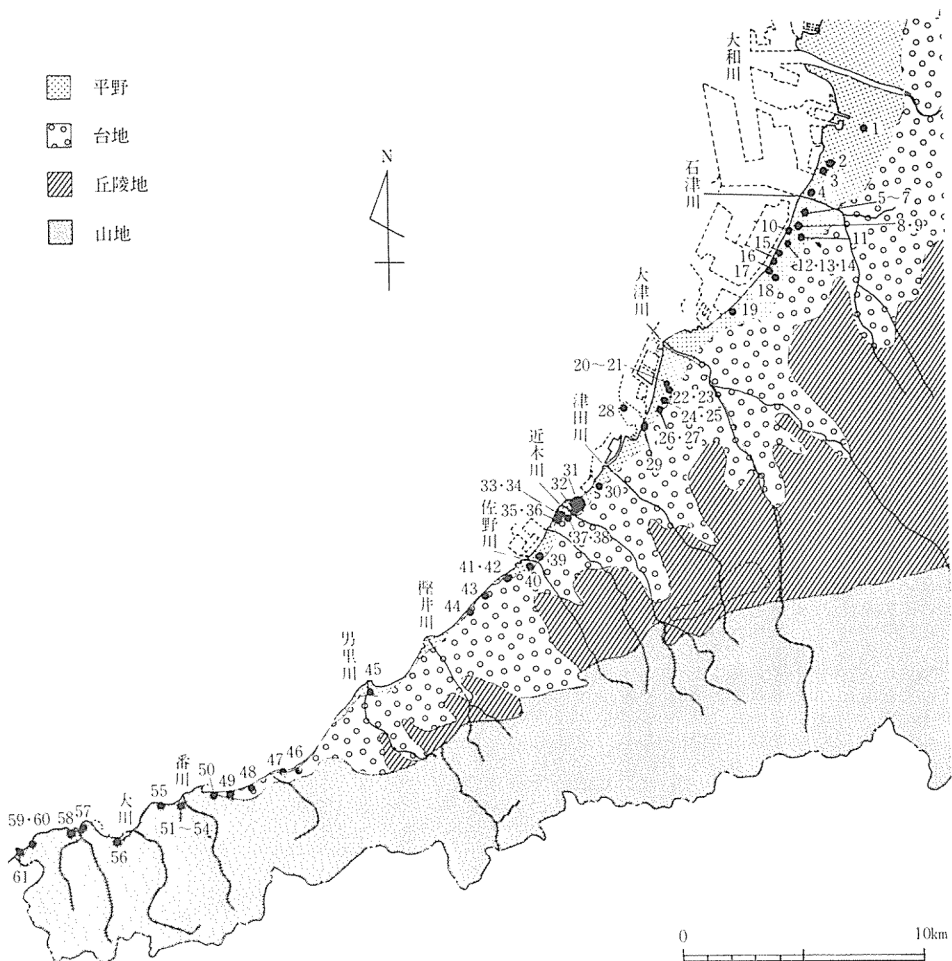
### 第2節 歴史的環境

貝塚市域の歴史的環境は既に『前報告<sup>(4)</sup>』にあるので、そちらに譲ることとし、ここでは泉州地方で本遺跡のように海浜部に立地する遺跡(現在の海岸線より400~600m前後までに所在する遺跡)を概観する(第2図・第1表<sup>(5)</sup>参照)。

旧石器時代の遺物は脇浜遺跡で出土しているだけである。この資料もプライマリーな状態で出土しておらず、現状ではこの時期の実態は不明である。

縄文時代に入ると、砂丘上に遺跡が出現してくる。浜寺石津町東遺跡(後~晩期)、浜寺





- |               |               |              |              |
|---------------|---------------|--------------|--------------|
| 1. 堺環濠都市遺跡    | 2. 湊西遺跡       | 3. 湊海岸遺跡     | 4. 浜寺石津町東遺跡  |
| 5. 浜寺諏訪森神社北遺跡 | 6. 浜寺諏訪森東2丁遺跡 | 7. 浜寺諏訪森遺跡   | 8. 浜寺北浜神社遺跡  |
| 9. 浜寺元町遺跡     | 10. 浜寺黄金山遺跡   | 11. 浜寺昭和町遺跡  | 12. 浜寺公園駅遺跡  |
| 13. 浜寺電話局前遺跡  | 14. 浜寺調和町砂丘遺跡 | 15. 羽衣海岸遺跡   | 16. 羽衣砂丘遺跡   |
| 17. 伽羅橋遺跡     | 18. 伽羅橋東遺跡    | 19. 助松遺跡     | 20. 春木天の川遺跡  |
| 21. 春木八幡山遺跡   | 22. 権限山古墳     | 23. 八幡古墳     | 24. 礼拝塚古墳    |
| 25. 牛神古墳      | 26. 加守三昧山遺跡   | 27. 穴口庵寺     | 28. 臨海町石鏃出土地 |
| 29. 下野町蛸壺出土地  | 30. 貝塚寺内町遺跡   | 31. 脇浜遺跡     | 32. 長楽寺遺跡    |
| 33. 沢新出遺跡     | 34. 沢海岸遺跡     | 35. 沢海岸北遺跡   | 36. 西出遺跡     |
| 37. 沢共同墓地遺跡   | 38. 沢遺跡       | 39. 森山遺跡     | 40. 湊遺跡      |
| 41. 松原遺跡      | 42. 中開遺跡      | 43. 羽倉崎東遺跡   | 44. 羽倉崎遺跡    |
| 45. 天神ノ森遺跡    | 46. 貝掛遺跡      | 47. 箱作今池遺跡   | 48. 田山遺跡     |
| 49. 山田海岸遺跡    | 50. 山田遺跡      | 51. 祇園橋遺跡    | 52. 岬公園内遺跡   |
| 53. 寺山古墳      | 54. 寺山南古墳     | 55. 深日古墳群    | 56. みどりが丘遺跡  |
| 57. 観音崎遺跡     | 58. 豊国崎遺跡     | 59. 岬加太線北丘遺跡 | 60. 小島東遺跡    |
| 61. 小島古墳      |               |              |              |

第2図 泉州地方海浜部の遺跡分布図

遺跡名	所在地	旧石器	縄文			弥生			古代	中世	近世	製塩土器	蛸壺形土器	土鏡・石鏡	立地
			前	中	後	前	中	後							
1	堺環濠都市遺跡	堺市							○	○	○	古墳	古墳・中世	沖積海岸平野	
2	淡西遺跡	堺市												沖積海岸平野	
3	淡海岸遺跡	堺市							○					沖積海岸平野	
4	浜寺石津町東遺跡	堺市			○									沖積海岸平野	
5	浜寺東遺跡	堺市												沖積海岸平野	
6	浜寺北遺跡	堺市							○	○	○	○	○	沖積海岸平野	
7	浜寺2丁遺跡	堺市							○	○	○	○	○	沖積海岸平野	
8	浜寺諏訪森遺跡	堺市							○					沖積海岸平野	
9	浜寺北浜神社遺跡	堺市								○				沖積海岸平野	
10	浜寺元町遺跡	堺市							○	○	○			沖積海岸平野	
11	浜寺黄金山遺跡	堺市							○	○	○			沖積海岸平野	
12	浜寺昭和町遺跡	堺市							○	○	○			沖積海岸平野	
13	浜寺公園駅遺跡	堺市										弥生		沖積海岸平野	
14	浜寺電話局前遺跡	堺市												沖積海岸平野	
15	浜寺昭和町砂丘遺跡	堺市												沖積海岸平野	
16	羽衣海岸遺跡	高石市												沖積海岸平野	
17	羽衣砂丘遺跡	高石市										古墳初	古墳	沖積海岸平野	
18	伽羅橋遺跡	高石市										弥生～古墳	弥生～古墳	沖積海岸平野	
19	伽羅橋東遺跡	高石市										弥生終末～古墳初	弥生後期	沖積海岸平野	
20	助松遺跡	泉大津市												沖積海岸平野	
21	春木川の川遺跡	岸和田市												沖積海岸平野	
22	春木八幡山遺跡	岸和田市											縄文～古墳	沖積海岸平野	
23	権限山古墳	岸和田市												沖積海岸平野	
24	八幡古墳	岸和田市												沖積海岸平野	
25	礼拝塚古墳	岸和田市												沖積海岸平野	
26	牛神古墳	岸和田市												沖積海岸平野	
27	加守三味山遺跡	岸和田市												沖積海岸平野	
28	穴口庵寺	岸和田市												沖積海岸平野	
29	臨海町石鏡出土地	岸和田市												沖積海岸平野	
30	下野町蛸壺出土地	岸和田市												沖積海岸平野	
31	貝塚寺内町遺跡	貝塚市												沖積海岸平野	
32	臨浜遺跡	貝塚市												沖積海岸平野	
33	長楽寺跡	貝塚市												沖積海岸平野	
34	沢新出遺跡	貝塚市												沖積海岸平野	
35	沢海岸遺跡	貝塚市												沖積海岸平野	
36	沢海岸北遺跡	貝塚市												沖積海岸平野	
37	沢西出遺跡	貝塚市												沖積海岸平野	
38	沢共同墓地遺跡	貝塚市												沖積海岸平野	
39	沢遺跡	貝塚市												沖積海岸平野	
40	森山遺跡	泉佐野市												沖積海岸平野	
41	淡遺跡	泉佐野市												沖積海岸平野	
42	松原遺跡	泉佐野市												沖積海岸平野	
43	中間遺跡	泉佐野市												沖積海岸平野	
44	羽倉島東遺跡	泉佐野市												沖積海岸平野	
45	羽倉崎遺跡	泉佐野市												沖積海岸平野	
46	天神ノ森遺跡	泉南市												沖積海岸平野	
47	貝掛遺跡	阪南町												沖積海岸平野	
48	箱作今池遺跡	阪南町												沖積海岸平野	
49	田山遺跡	阪南町												沖積海岸平野	
50	山田海岸遺跡	岬町												沖積海岸平野	
51	山田遺跡	岬町												沖積海岸平野	
52	祇園橋遺跡	岬町												沖積海岸平野	
53	岬公園内遺跡	岬町												沖積海岸平野	
54	寺山古墳	岬町												沖積海岸平野	
55	寺山南古墳	岬町												沖積海岸平野	
56	深日古墳群	岬町												沖積海岸平野	
57	みどりが丘遺跡	岬町												沖積海岸平野	
58	観音崎遺跡	岬町												沖積海岸平野	
59	豊国崎遺跡	岬町												沖積海岸平野	
60	小島東遺跡	岬町												沖積海岸平野	
61	小島古墳	岬町												沖積海岸平野	

第1表 泉州地方海浜部の遺跡一覧表

黄金山遺跡(晩期)、春木八幡山遺跡(中～晩期)、脇浜遺跡(晩期)等である。いずれも明確な遺構は検出されていないが、脇浜遺跡では、わずかながら生活の痕跡が認められた。また臨海町の埋め立て地からは、浚渫中に植物遺体と共に石鏃がはき出されたという。プライマリーな層を伴っているとすれば、海岸線の移動を考える上で興味深い。

続く弥生時代では、浜寺諏訪森遺跡(前～中期)、浜寺黄金山遺跡(前～後期)、春木八幡山遺跡(前～後期)、沢新出遺跡(前期)等がある。浜寺黄金山遺跡では、墓域が見つまっているが、集落は今の所確認されていない。また湊遺跡(庄内式期)では製塩土器、羽衣砂丘遺跡(後期)では蛸壺形土器が出土する等、後期以降になると製塩土器や漁撈具の出土がみられる。

古墳時代では、羽衣砂丘遺跡(前期～後期)、伽羅橋遺跡(後期)、脇浜遺跡(前期・後期)、沢共同墓地遺跡(前期～中期)、小島東遺跡(前期～後期)等の遺跡がある。いずれも、製塩土器・蛸壺形土器・土錘等漁撈具の出土が特徴としてあげられるが、集落は前時代と同様に確認されていない。後期になると、岸和田市域と岬町域で古墳(群)が形成されている。

古代から中・近世にかけては、遺跡の数は多いが、調査例が少ないため実態の判然としないものが多い。製塩土器は、小島東遺跡(奈良時代)、田山遺跡(奈良時代)で、蛸壺形土器は脇浜遺跡(中世)、湊遺跡(中世)、田山遺跡(中世)等でそれぞれ出土している。

以上、海浜部に立地する遺跡について羅列的に記述してきた。これらの遺跡は漁撈活動と密接な関係があったと考えられる。これからは漁撈具、製塩土器等を伴う、遺構の発見例も増えていくであろう。今後の調査成果に期待したい。

註(1) 市原実・市川浩一郎・山田直利『岸和田地域の地質』地域地質研究報告(5万分の1地質地図幅) 地質研究所 1986

(2) (財)大阪府埋蔵文化財協会『島中遺跡』 1986

(3) 豊田兼典「脇浜遺跡の地形環境」((財)大阪府埋蔵文化財協会『脇浜遺跡』)1986

(4) (財)大阪府埋蔵文化財協会『脇浜遺跡』 1986 以下『前報告』と呼ぶ。

(5) 堅田直『岸和田市春木八幡山遺跡の研究』 1965

大阪府史編纂委員会『大阪府史』第1巻 1978

岸和田市史編纂委員会『岸和田市史』第1巻 1979

西山要一『淡輪磯山古墳群』 1980

(財)大阪文化財センター『田山遺跡』 1983

大阪府教育委員会『大阪府遺跡分布図』 1986

(財)大阪府埋蔵文化財協会『脇浜遺跡』 1986

貝塚市教育委員会『貝塚市遺跡群発掘調査概要IX』 1987

等の文献を参考にして作成した。

### 第三章 調査の成果

#### 第1節 調査の方法と経過

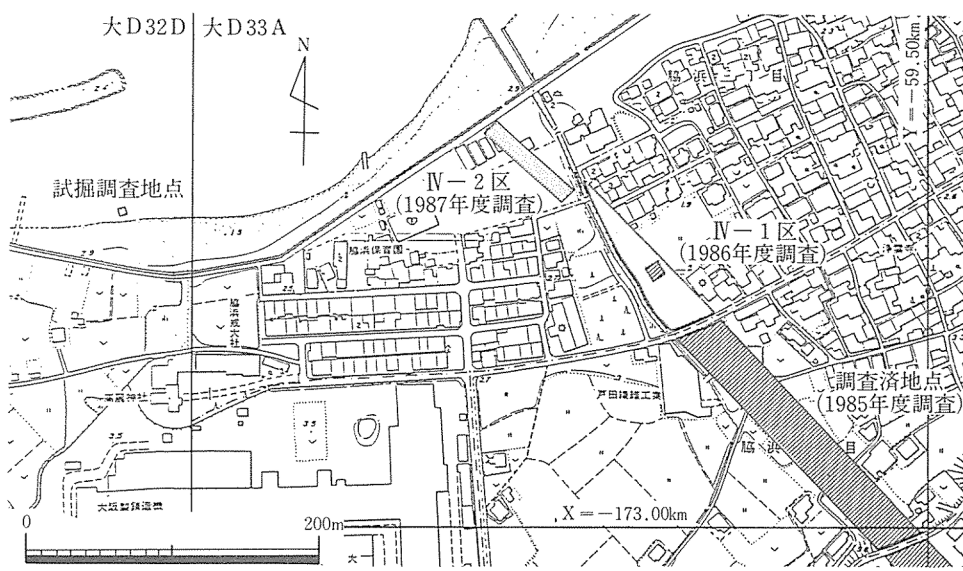
今回調査を行ったのは、Ⅳ-1区が全長125m、幅35mの三角地内約2250m<sup>2</sup>、Ⅳ-2区が全長70m、幅12mの約840m<sup>2</sup>である(第3図)。

ここで、本書で用いる調査区の呼称について説明する(第4図)。地区割の方法は、まず大阪府発行新版1/2500の地形図を12等分し、500mの大区画を作る。次にこの500mの区画を25等分し100mの中区画を作る。さらにこの100mの区画を縦・横それぞれ25等分し、最小の4m区画を作った。(詳細は『前報告』を参照)。これにより、今回の調査区の中央は大D3(地形図名)-3A(大区画)-19(中区画)-HD(小区画)で示される。

また、今回の調査では遺構の確認はできなかったが、層序の節を中心に91-ORといった記号が出てくる。これは「遺構番号-遺構の種類」を表し『前報告』で用いたものである。

調査は初めに、盛土・旧耕作土・攪乱部分を機械掘削し、それ以下を人力で掘削した。

Ⅳ-1区では、前回の調査で検出した自然河川91-ORの続きの確認と別の砂堆の有無、



第3図 調査区周辺図

基盤の層である更新統の砂礫層の検出等を主な視点として進めていった。そして、T.P. -1.2m～-2.0mのところまで更新統の砂礫層に達した。この層の上面でも遺構は確認できず、一部を80cm程度掘り下げ断面観察と共に遺物の確認を試みた。更新統の地層まで調査したことで当初の目的は達したと判断し調査を終了した。

Ⅳ-2区においても遺構は確認できなかった。現地表面より約3m掘削した。基本層序の第2層をやや掘り込んだ所で湧水等により調査を断念せざるを得なかった。この為一部

を約1m機械で掘り下げたが、出土遺物(近世～近代)に変化は見られなかった。以下の層序はボーリングで調査することとした。

## 第2節 層序

脇浜遺跡の層序は、段丘崖であるⅠ区から海側のⅣ区を調査した『前報告』によって記載され、上位より第0層から第9層、及び無遺物層、基盤になっている礫層に区分された。この区分は、前回よりさらに海寄りの本調査区においても、ほぼ踏襲されるが、新たな知見も加えられた。本節では、はじめに脇浜遺跡の基本層序を概説し、続いて今回の調査区の層序を述べることにする。なお、第6図は、主にⅠ区～Ⅳ区の西壁B～Gを結ぶ断面図であるが、必要に応じて他の部分の断面図を援用して作成した。

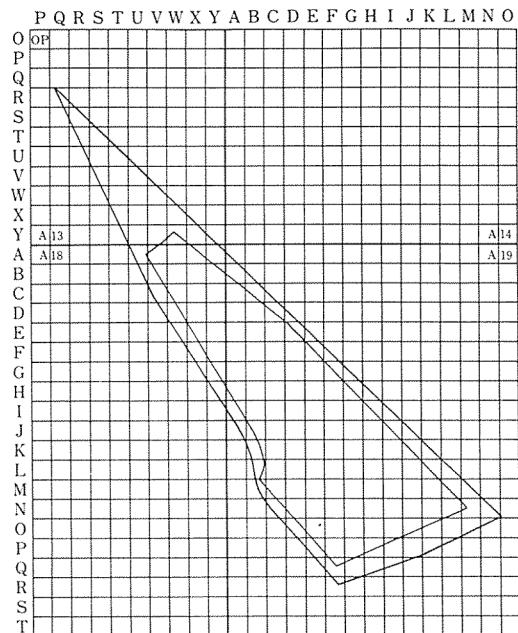
### 脇浜遺跡の基本層序(第6図(1))

第0層：現代盛土。

第1層：現代耕土及び表土層。Ⅳ-2区では海浜成の細粒砂～砂礫よりなり浜堤を形成している。

第2層：近代の遺物を包含する黄褐色シルト混じり砂ないし砂礫によって構成される。

第3層：近世の遺物包含層を言うが、場所により層相が異なる。海側Ⅳ-1区に分布す



第4図 Ⅳ-1区 地区割図



る第3 a～3 d層は斜交葉理の発達する砂礫層である。一方、第3 e・3 f層は砂礫混じりシルト層で、段丘崖寄りの地域に分布し、粒度の異なる碎屑物が均質に混じりあう。前回の調査時に行ったプラント・オパール分析の結果から耕作土であったと考えられる。

第4層：古墳時代後期から中世にかけての遺物を包含する地層を第4層と総称する。段丘崖寄りの砂堆と呼んでいる第9層の上には、砂混じり粘土層が覆っており、上から第4 a・4 b・4 c層に区分される。第3層同様、分析の結果から耕作土であったと考えられる。一方、第4 d層は、調査区の北西部に広がる砂礫層である。

第5層：古代から中世にかけての沼94-O L(『前報告』参照)の堆積層であり、離水域の第4 b層とは同時異相の水成層である。この地層は第6図には表われてこない。

第6層：古墳時代後期の遺物包含層であるが前期のものも混じる。主に自然河川91-O Rの埋土である。粘土層と砂礫層の複雑な互層からなる。

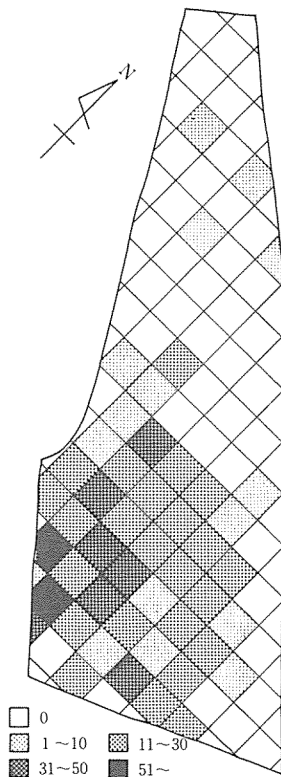
第7層：古墳時代前期の遺物包含層であり、主に自然河川88・91・97-O Rの埋土である。粘土層と砂礫層の互層からなる。

この第6層と第7層は肉眼観察では識別し難いが、年代の異なる2時期の遺物が、概ね上・下に分かれて出土するので区分した。

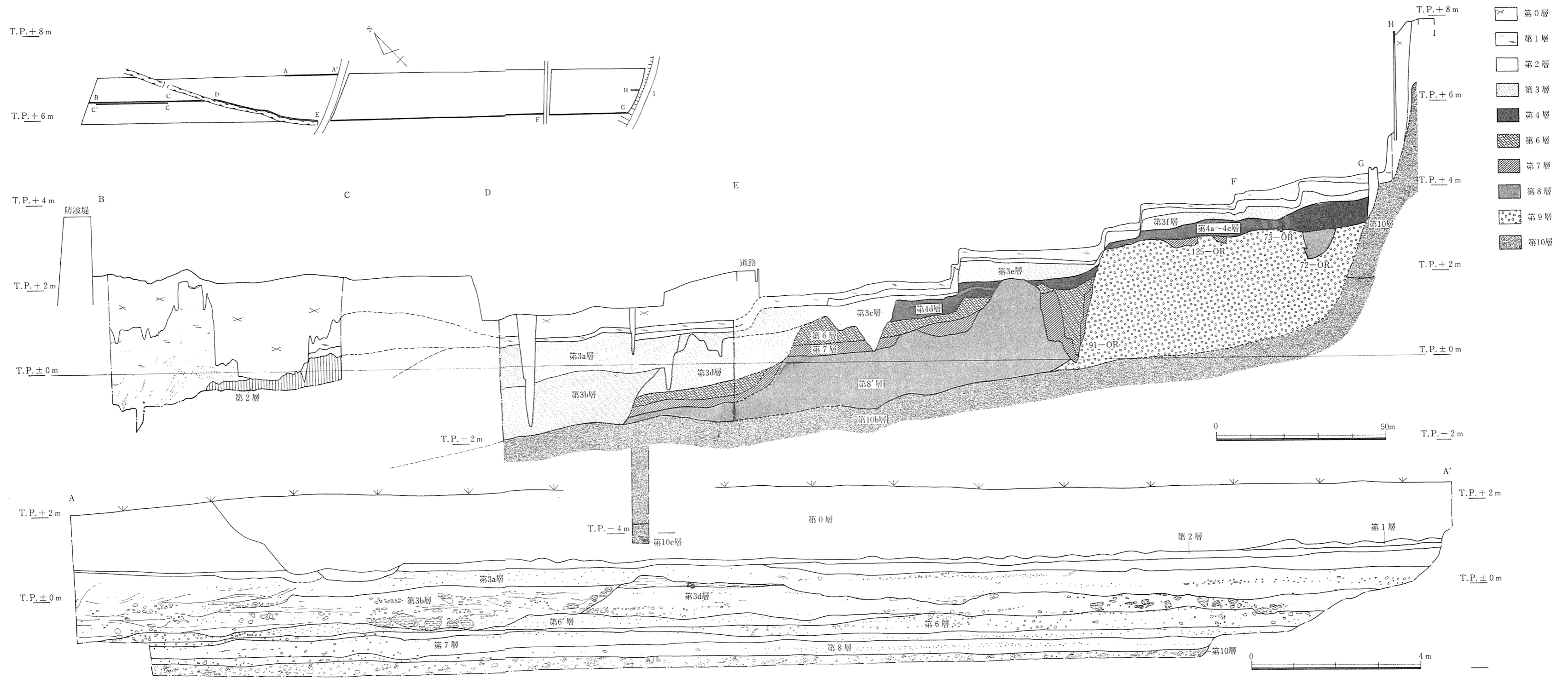
第8層：縄文時代晩期の遺物包含層で72・73-O Rの埋土である砂礫混じり粘土層をいう。また、III～IV区で第7層に覆われ、第9層を覆う砂礫層中にも、わずかながら縄文時代晩期の土器が含まれているので、ここでは第8層として扱うことにする。なお、『前報告』はこの地層を無遺物層と呼んだだけで層準を明らかにしていないが、断面図に示したように、この層準に位置づけられる。

第9層：段丘崖から海側へ70mにわたって広がる砂礫層である。T.P.+2 mのところで植物遺体層を挟む。遺物の出土はなかったが、縄文海進期以降、縄文晩期までに形成されたと考えられている。

第10層：『前報告』で基盤となっている礫層とした更新統の地層で、第10 a層は黄色～灰色粘土層、第10 b層は緑灰色～青灰色砂礫層、第10 c層は灰色粘土層である。



第5図 古墳時代土器地区別  
出土破片数分布図



第6図 (1) 断面模式図、(2) IV-1区北東壁断面図

IV-1 区の層序 (第6図(2))

IV-1 区には上位より第0層・第1層・第2層・第3a～第3d層・第6層・第7層・第8'層・第10b層が分布する。(第0～2層の記載は省略する)

第3a層：オリーブ黄色(5Y6/4)砂と砂礫層の互層。径1～4mm前後の粗粒砂～細礫からなる。

第3b層：明灰黄色(2.5Y5/2)砂礫層。斜交葉理が発達する。本層は下位層を著しく削剥し、基底面は第10層にまで達している(巻頭図版二)。礫は径3mm～数cmの細～中礫が主体であるが、20cmを越える大礫も含まれる。いずれも円礫である。また、径20cm前後の粘土偽礫も散在する。出土した遺物の中・近世の蛸壺形土器・瓦・陶磁器などであるがその量は少ない。

第3c層：暗黄灰色(2.5Y5/2)砂礫層。礫は3mm～5cmの細～中礫が多い。

第3d層：オリーブ灰色(2.5GY6/1)砂礫層。

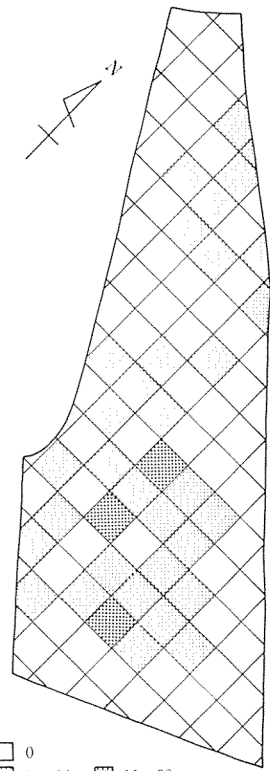
第6層：暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)砂礫層。径60cmの巨礫を含む。基質は1mm以下の中～粗砂粒である。土師器の飯蛸壺と須恵器(第13図35・36)が出土したが、その量は少ない。

第7層：青灰色(5BG5/1)砂礫層。礫は径15cm以下の中～大礫で円礫である。基質は砂粒であるが、東南部へ移るにつれて、粘土質シルトへ移行化する。なお、上面で径5cmのサンドパイプ(カニの巣穴?)を確認した。上部はシルト質砂に漸移する。出土遺物は、土師器(第10図)、土師器蛸壺形土器(第11・12図)であり須恵器は確認できなかった。

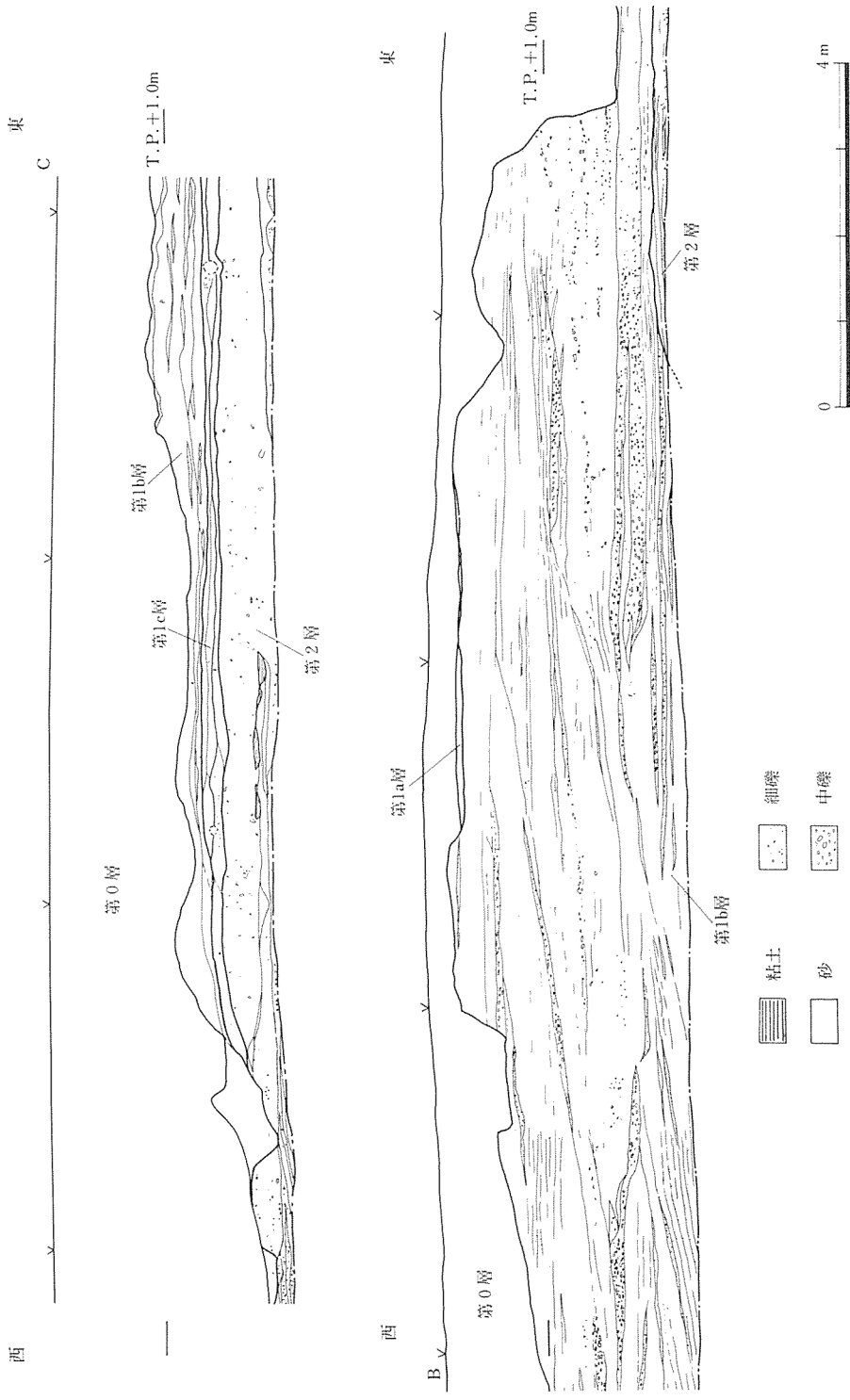
本層は、前回の調査で確認した古墳時代前期から後期にかけての流路91-O R堆積層の同時異層である。

第8層：明緑灰色(5G4/1)砂礫層。礫は径10cm以下の細～中礫までを含む。縄文時代晩期の土器(第9図1～3)が僅かに出土している。

第10b層：明青灰色(5BG7/1)砂礫層。更新統の地層であり上位層に不整合で覆われている。礫は径10cm以下の和泉砂岩・花崗岩・チャート等で重円礫や重角礫が目立つ。



第7図 中・近世土器地区別  
出土破片数分布図



第8図 IV-2区北東壁断面図 (断面位置は第6図を参照)

礫間を埋める基質は明青灰色極細粒砂である。植物遺体を含む粘土薄層を挟み、自然木を含む。遺物は確認していない。

Ⅳ－1区に分布する地層は全て沿岸成層であり、上述のように明確な遺構は確認することができなかった。

#### Ⅳ－2区の層序（第8図）

本調査区中央部分深さ約2mは著しく攪乱され、第1層以下の地層は主として調査地の東部と西部に残っている。なお、この攪乱層(第0層)は昭和初期に埋められた瓦礫であり、したがって本調査区の第1層は、それ以前に形成された地層である。以下第1層より説明する。

第1層は層序、層相により第1a～1c層に区分される。

第1a層：灰褐色(7.5Y R4/2)砂質粘土層であり、層厚は約30cmある。上半部は明黄褐色(10Y R6/6)を呈し、粘性が強い。調査地の東端にわずかに分布する。また、調査区東部の下位層が構成する浜堤上の凹地にも薄く分布する。

第1b層：調査区東部では灰白色(2.5Y 7/1)砂層よりなり、層厚は約60cmである。淡黄色(2.5Y 8/3)砂薄層(層厚約6cm)を3～4層挟む。

調査区西部の本層は浜堤を構成する地層であり、白色の細粒～粗粒砂層を主体とし、砂礫薄層を挟む。層厚は2.7m以上あり、残存する上面高度は第1a層より高くT.P.+2.15mである。基底部約50cmの堆積物の粒度は細粒であるが、中部は概して粗粒であり、上部へしだいに細粒へと移化する。防波堤から約30m以東では平行葉理が発達するのに対して、その以西では極めて著しい斜交葉理が発達する。斜交葉理は見かけ上、東から西へ(陸側から海側へ)10°～20°の角度で傾斜する。

本層には、東部・西部いずれにおいても近代と考えられる陶磁器や瓦が含まれる。

第1c層：オリーブ黒色(10Y 3/1)の中～細礫混じり中～細粒砂層からなり、わずかにシルトを含む。層厚は30～40cmである。2～3層に細分され、粘性のある灰白色粘土質砂薄層を挟む。

本層は、調査区中・東部では、第1b層に削剝されて分布しない。主として近代の陶磁器が含まれる。

第2層：本地区の第2層は、主として中～細礫を多量に含む灰白色(10Y 8/1)砂層よりなり、青味をおびた灰色砂質粘土薄層をレンズ状に挟み層厚は70cm以上ある。下部には砂礫層を伴う北傾斜の斜交葉理が発達する。本層は第1c層と同様に調査区東部では第1b層に削剝されて分布しない。本層には、陶磁器が含まれる。

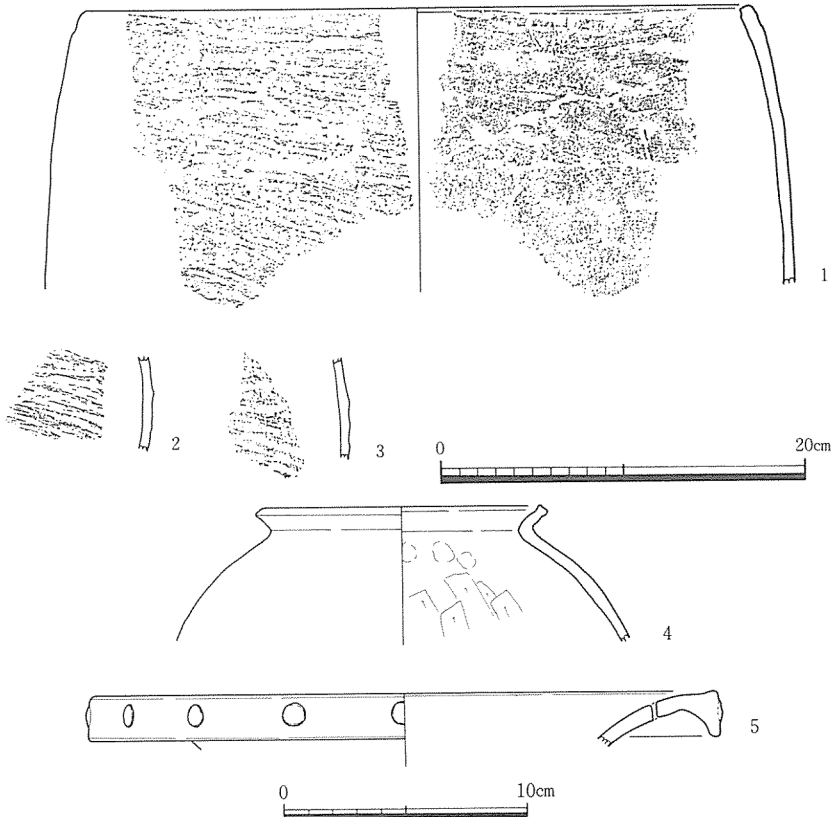
### 第3節 出土遺物

#### 概要

出土した遺物は、Ⅳ-1区では縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・瓦であり、総破片数は約1100点である。Ⅳ-2区では近・現代の遺物が大半を占めた。その他、須恵器が1点と最下層で近世の遺物が少量出土した。

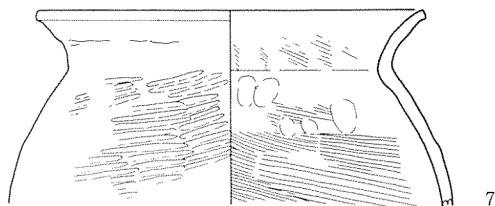
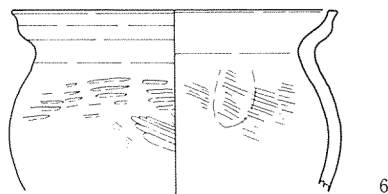
#### 縄文・弥生土器(第9図・図版六)

縄文土器は、調査区東南部で第8層から2個体分が出土し、全てを図示した。(1)は復原口径36.2cmを測る大型の深鉢の破片である。口縁部は内弯気味に終わる。外面は条痕調整で、内面も軽く条痕調整を施している。(2・3)は同一個体で、体部の破片である。外面は条痕調整、内面はナデ調整が施されている。いずれもほとんどローリングを受けていない。2個体とも晩期のものと考えられる。

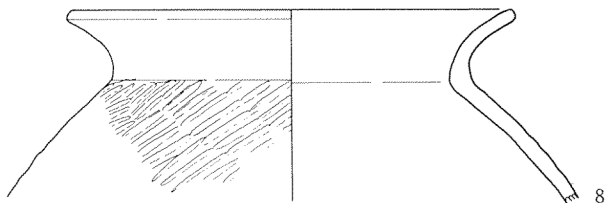


第9図 出土遺物実測図(1)

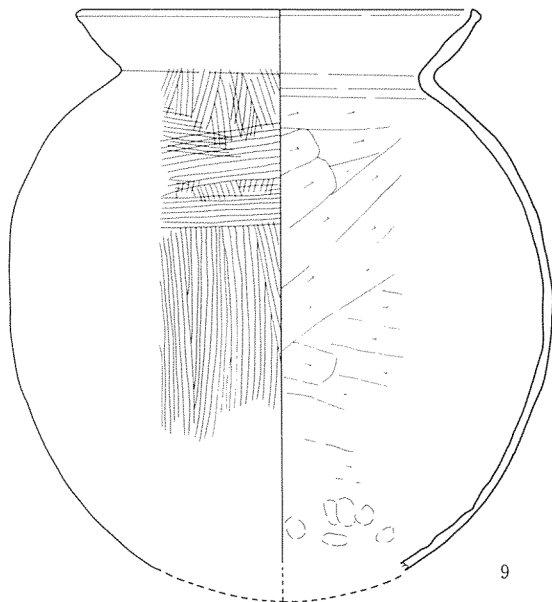
弥生土器は調査区東南部で第7層から2点出土し、共に図示した。(4)は甕の破片で口縁部は上方に拡張している。体部内面はケズリを施す。(5)は広口壺で、垂下された口縁部外面に円形浮文がつく。2点とも非常に磨滅している。中期中葉～後半のものと考えられる。



土師器(第10図・図版六)  
『前報告』では、第10図に示す土器を土師器として扱ったので、今回もそれに従い、土師器として報告する。



今回は、壺・甕・高杯等合計130片出土しているが、図化できるのは、10点程度である。甕では、(6～8)のように外面にタタキ目を持つ土器が5点と、口縁端部が肥厚し外面はハケ調整、内面をヘラケズリする土器(9)が1点見られる。



このほか、図示はしなかったが平底で外面にミガキの施された壺の底部、口縁部に凹線文を持ち円形竹管浮文の施された二重口縁壺の破片、高杯脚部がある。



第10図 出土遺物実測図(2)

## 蛸壺形土器（第11・12図・図版七・八）

今回の調査でも蛸壺形土器が数多く出土した。ここでは、小型のものを飯蛸壺、大型のものを真蛸壺と呼び、両者を総称する時に蛸壺形土器という言葉を用いる。

土師器のいわゆるコップ形の飯蛸壺は全部で約320片出土している。その内全体の形状の判るもの約60点についてみると、大きく4つの形態に分かれる（分類基準については、まとめを参照）。

I a類(14～16)：平底で外面にナデの施されるもの。口径5～6 cm前後、器高8～10 cm前後のものが多い。内面調整はヘラ状工具によるナデ(14)と指によるナデ(15～16)のものがみられる。(14・15)は、底部から口縁部まで一気に作ってから内外面をナデ調整する。(16)は口径7.2 cm、器高14.0 cmを測る大型であり、底部から7 cmまでをまず作り内面にナデ調整を施し、続いて口縁部までを作り内外面をナデ調整している。約15点出土。

I b類(10～13)：平底で外面にタタキの施されるもの。(10)のように底径0.9 cmを測る小さいものは数少ない。口径は5.1～6.8 cm測るが、6 cm前後のものが多い。器高は8.5～12.3 cmであるが、(13)のように細長いものもある。タタキ目の方向は、水平(10・13)、右上がり(12)、右下がり(11)と三種類ある。内面の調整は指によるナデ(10・11・13)と、ヘラ状工具によるナデ(12)の二種類があり、いずれも平滑に仕上げられている。約20点出土。

この中で(12)は、内面をヘラ状工具でタテ方向にナデ調整を行い、色調はにぶい黄橙色(5 YR6/4)を呈している。これと同じ形状、調整のものは前回の調査でも出土しており、他のI b類のものとは一見して区別できる。

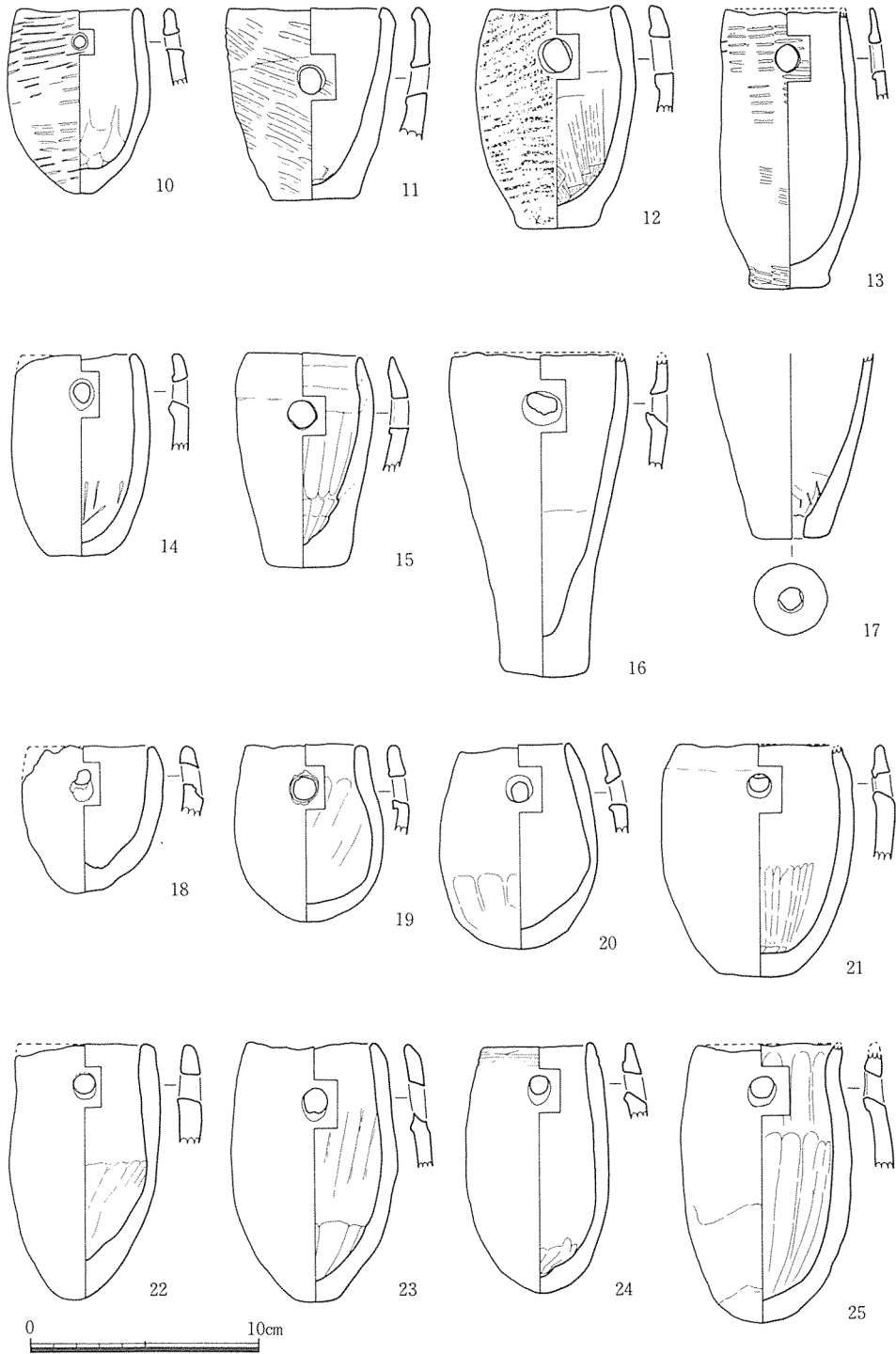
II a類(17)：平底の底部に穿孔があり、外面にナデの施されるもの。底径3.3 cmと小さいので飯蛸壺とした。他に例がなく全体の形状は不明であるが、口縁部の下にも紐穴があくと思われる。底部は、焼成前に棒状の工具により穿孔されている。内面はヘラ状の工具で横方向にナデが施されている。

III a類(18～25)：丸底で外面にナデの施されるもの。口径は6 cm前後だが器高は6.4～12.6 cmと開きがある。(18)は口径4.6 cm、器高6.4 cmを測り、今回調査の中では最も小さい。平底気味のもの(21)や尖底気味のもの(22)もある。また、靱痕のあるものを1点確認している。内外面の調整は全てナデで平滑に仕上げられている。約35点出土。

ほぼ完形品に限って見た場合では、口縁部が小さく欠けているものが目立つ。使用時に飯蛸壺同士が軽くぶつかり合ったためにおこったのであろう。

各類の出土数は、III a類の出土が最も多く続いてI b、I aの順でII a類は1点しか出





第11図 出土遺物実測図(3)

土していない。これは、前回の調査でのあり方と同じであり本遺跡での傾向を示している。

続いて、真蛸壺について報告する。

前回の調査で、口縁部の下方に穴のあく破片が出土している。ここでは、まずそれと同じ規模・傾きの口縁部片を真蛸壺として扱う。

また今回も底部が15点ほど出土している。これらの底部から体部にかけての傾きは甕・鉢と比べてみると、急な傾斜を示す傾向があり、この形態の違いは、機能の差を示していると考えている。よって、第12図に示す土器を、真蛸壺として報告することとする。

以下、説明の便宜上、口縁部と底部に分けて記述してゆく。

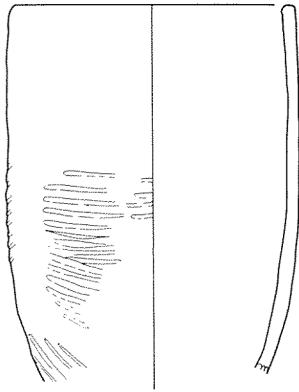
体部上半から口縁部にかけての破片は全部で約10点の出土があった。しかし、体部に紐穴の残るものは出土していない。出土したものは、口縁部がほぼ直立して終わるもの(第12図(26))と、口縁部が内弯気味に終るもの(第12図(27))の二つに分かれる。復原口径は(26)が11.0cm、(27)が13.0cmを測るが、他のものを含めると7.6~13.0cmの範囲となり、11cm前後のものが多い。外面にはタタキ目が残るが、口縁部付近になるとヨコナデにより、タタキ目の消えているものもある。内面にはユビあるいは板状の工具によりナデを施し平滑に仕上げている。(27)の体部下半は焼成後に内側から穿孔されている。水抜き穴の可能性も考えられよう。

体部下半から底部にかけての破片は、底部の形状により大きく三つに分かれる。

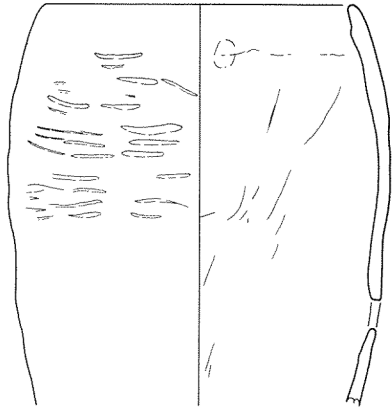
まず、第12図(28・31)のように中央部分に穴をあけたままで巻きあげられたもの。いずれも穴の内側までナデ調整が及んでいるので、中央部分に充填してあった粘土が後で剥離した結果ではないと考える。このような例は全部で3点を数える。外面にはいずれもタタキ目が残るが、右上がり、右下がり共にある。

次に第12図(29・30・33)に示す平底の底部を作った後で棒状工具により穿孔されたもの。底部から体部にかけての傾きは急で、体部半ばで垂直近くになるもの(23)もある。外面には、右上がり、右下がりのタタキ目が残るもの、タタキの施されていないものがある。内面はへら状の工具により平滑に仕上げられている。この形態のものは7点出土している。

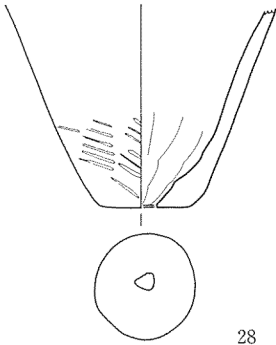
最後は第12図(32・34)のように底部穿孔のない平底のもの。この中には完全な平底でないものも含まれる。(34)も底部から体部にかけての傾きが急で、体部半ばになると内傾しはじめている。底部には木の葉の圧痕が残る。外面はタタキ目の残るものと、タタキの施されないものがある。全部で6点出土した。



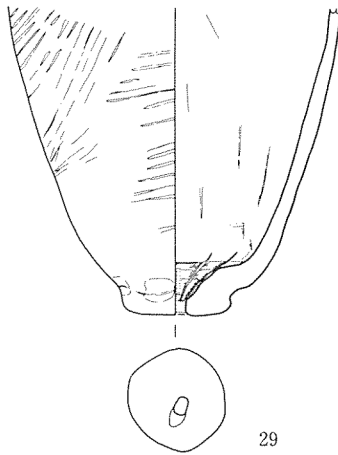
26



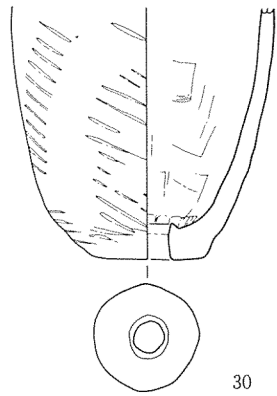
27



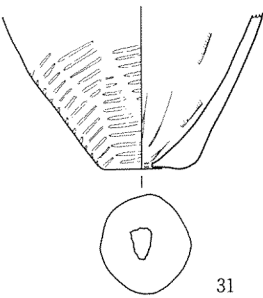
28



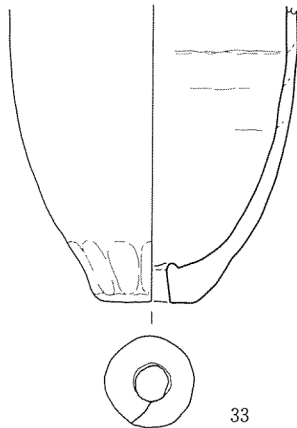
29



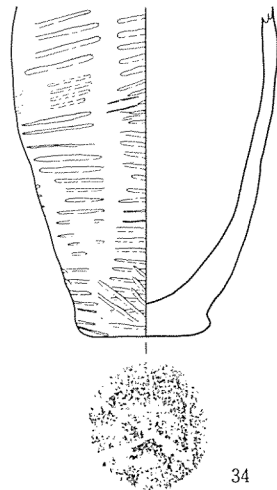
30



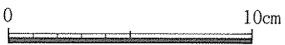
31



33



34



第12図 出土遺物実測図(4)

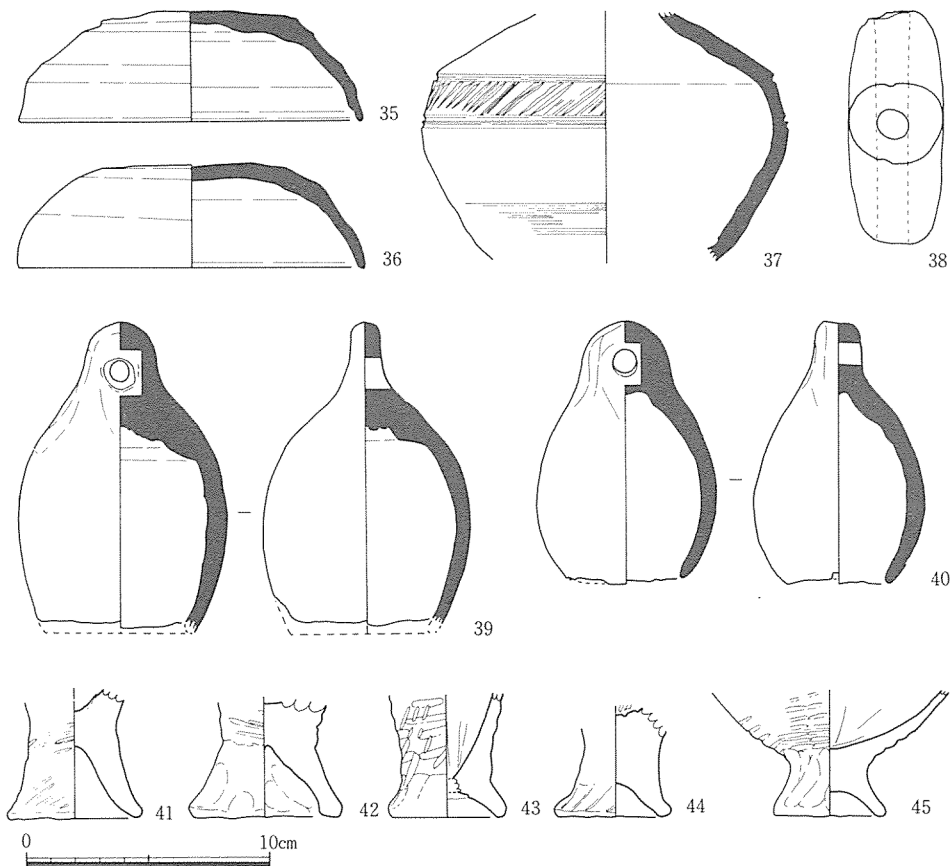
その他の遺物（第13・14図、図版九）

最後に、その他の遺物について記述しておく。

製塩土器は6点出土し、その内5点を図示した。いずれも第7層からの出土である。前回の調査と違い量は少ない。第13図(41・42)は脚台高3～4cm、脚台径5～6cmを測り、第13図(43・44)は脚台高2cm前後、脚台径5cm前後を測る。これらの体部は直線的に斜め上方に広がると考えられる。また第13図(45)は脚台高2cm、脚台径4.5cmを測る。この体部は椀状に大きく広がると考えられる。

須恵器は杯身・杯蓋・甕・台付長頸壺・飯蛸壺等約120片が出土している。第6層に多い。第13図(35・36)は杯蓋である。(35)は平坦な天井部をもち、体部中ほどで内弯し口縁部へ移行する。口縁部内面には段を有する。全体的に稚拙な印象を受ける。

飯蛸壺は約30点出土しているが、完形に近いものは図示した2点だけである。(39)は口



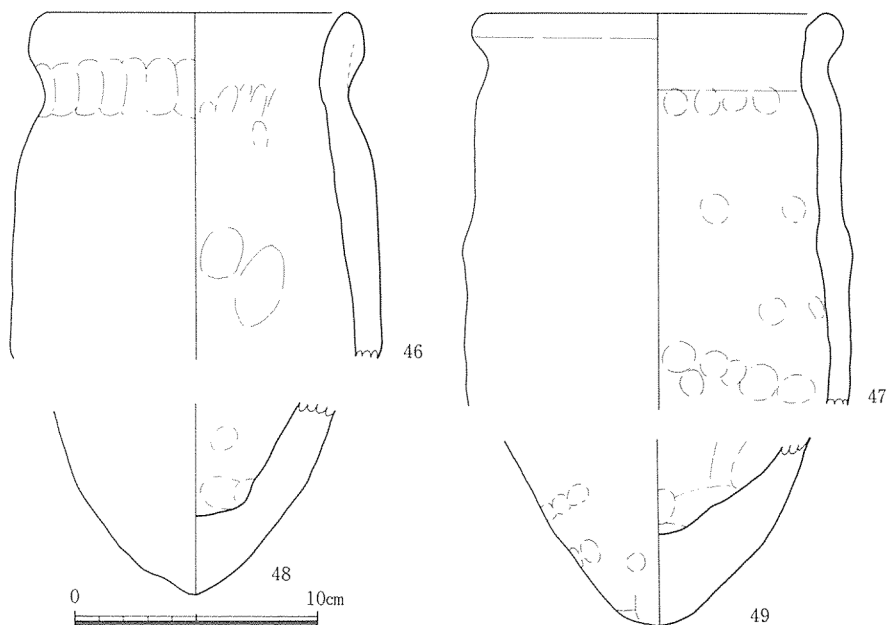
第13図 出土遺物実測図（5）

径6.5cm、器高13cm、(40)は口径4.7cm、器高10.8cmを測る。土師器と同様に口縁端部は破損している。また図示はしなかったが土師器で釣鐘形を呈するものの破片が1点出土している。『前報告』で示したものに比べて釣部の作りがしっかりしており、灰白色を呈し胎土も異なる。

土鍾は5点出土している。全長8～10cmで重量90～110gの大型のもの、全長5cm程度、重量5g程度の小型のものがある。第13図(38)に示す土鍾は、胎土中に結晶片岩を含んでいるのが特徴である。なお、胎土中に結晶片岩を含む土器は、前回の調査でも土師器の壺に1点見られる。

真蛸壺でも、第14図に示すような砲弾形を呈するものは35片出土している。(46・47)は体部上半の破片である。口径は、(46)が12.5cm、(47)が14.0cmを測る。口縁部は粘土を折り返すことにより玉縁状を呈しつつ外反している。体部はあまり外に張らず直線的のびてゆく。(48・49)は底部で、いずれも尖底である。底部は厚さは3.5cmを測り、ぶ厚い。いずれも黄橙色である。

このほかにも、図示をしなかったが、土師器の甕片・カマド片、瓦器碗の破片、陶磁器片、瓦片等が出土している。いずれも小破片が多いが、瓦には古代のものも見られ注目される。



第14図 出土遺物実測図(6)

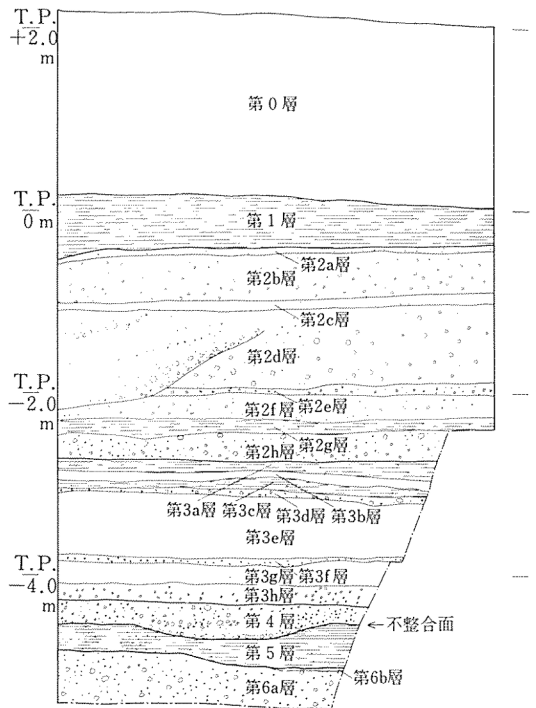
## 第4節 試掘調査地点の調査結果

はじめに

1986年度はさらに阪神高速道路湾岸線建設予定地内で、試掘調査を実施した。

調査地点は現在でこそ埋め立てにより陸地化しているが、一昨年までは海だったところである。埋め立て以前で言えば、近木川河口に広がる三角州の中で最も内湾している部分にあたる。旧海岸線からは約30m沖に出たところで、近木川から北西へ400m、貝塚中央線の調査区(Ⅳ区)から西へ300mの地点である。本協会の地区割呼称によれば、大D3-2D-15-WL付近にあたる(第3図・図版一参照)

調査は5m四方を鋼矢板で囲み、現地表から3mまでを機会掘削し、以下7.5mまでを人力で掘削した。現地調査は1987年2月16日から開始し、3月7日に終了した。



- 第0層 現代盛土層
- 第1層 緑灰色(5G5/1)粘土質シルト層
- 第2層 ぶい黄褐色(10YR5/2)粘土質シルトと砂礫の互層
- 第3層 緑灰色(10GY5/1)シルト質粘土と砂と砂礫の互層
- 第4層 灰白色(10Y7/1)砂礫層
- 第5層 ぶい黄褐色(2.5YR4/3)シルト質粘土
- 第6層 褐灰色(7.5YR5/1)砂礫層

第15図 北西壁断面図(凡例は第6図と同じ)

### 調査の成果

今回の調査では遺構を確認することができなかった。遺物も現代の海底堆積層の中から若干出土しただけである。以下、地層の断面観察の所見を述べる(第15図)。

第0層：埋め立て地造成に伴う盛土。T.P. 0mから層厚2mを測る。

第1層：緑灰色(5G5/1)粘土質シルト層。現代の海底のヘドロ層である。T.P. -0.5mから上に約50cm堆積している。

第2層：ぶい黄褐色(10YR5/2)を主とする粘土質シルトと砂礫の互層。T.P. -2.7~-0.5mにわたり堆積している。おもみやビニル管を含む現代の地層である。なお、この層からは磨耗の著しい、中・近世真蛸壺片、陶磁器片、瓦片が出土している。

第3層：緑灰色(10GY5/1)を呈するシルト質粘土と砂・礫の互層。T.P. -4.4～-2.7 mにわたって堆積している。上位より、シルトの薄層を挟むシルト質粘土層(第3 a層)、粗粒砂層(第3 b層)、シルトの薄層を挟むシルト質粘土層(第3 c層)、最大径10cmを測る中礫質砂層(第3 d層)、粗粒砂層(第3 e層)、径1～2 cmの中礫質砂層(第3 f層)、砂質シルトの薄層を挟む粗粒砂層(第3 g層)、径3 cm前後の中礫質砂層(第3 h層)と重なる。礫はいずれも円磨されている。第3層は全体に多くの貝化石が含まれていたが、人類遺物は全く確認することできなかった。

第4層：灰白色(10Y7/1)砂礫層。T.P. -4.6～-4.3mにわたって堆積している。径5 cm未満の中礫を多く含むが、稀に径10cmを越える大礫が混じる。亜円礫・亜角礫からなる。基質は径4 mm未満の細礫であり、わずかに粘土が充填している。

第5層：にぶい黄褐色(2.5Y R4/3)シルト質粘土層を主とする地層であり、下部で砂質となる。中部層準には、微細な植物片の密集帯を挟み、径20cm程度の自然木を含む。T.P. -5.0～-4.5mの範囲で堆積している。

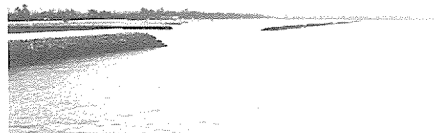
本層と上位の第4層とは不整合である。

第6層：褐灰色(7.5Y R5/1)砂礫層。T.P. -4.8m以下で堆積しており、下限は不明である。礫は径1～5 cm前後の中礫が主体であり、亜円礫、亜角礫からなる。基質は極粗粒砂から細礫である。

また、この地層の上部には、厚さ10m以下で暗オリーブ灰色(2.5GY3/1)砂質シルトの薄層(第6 b層)が挟まれる。

第4～6層からは、貝化石及び遺物を一片も見い出すことはできなかった。

なお、第3 f層より下の層については分析用土壌サンプルを採取した。その結果は付論を参照していただきたい。



第16図 沢海岸遺跡遠景

## 第Ⅳ章 ま と め

### 地形変遷について

これまでの脇浜遺跡の調査では、前に「基盤となる層」と呼んだ更新統の地層に対してかなり執拗にこだわってきた。その出発は、前報告に記載した2点のナイフ形石器と「波食崖」と呼ばれる段丘崖である。この段丘崖の形成が海進期の浸蝕以外に本来の地質構造に由来するものがないのかどうか、また、低位段丘堆積物の分布が顕著でない貝塚市以南の中位段丘縁辺部で、ナイフ形石器の時代の地層としての低位段丘相当層が埋もれている可能性はないのかどうか、脇浜遺跡に対する主題の1つは、今回もまた一部を明らかにしつつ新しい課題を残した。脇浜遺跡の地形推移については前報告の豊田兼典の考察があるが、今回の調査による1・2の知見と課題を加えておきたい。

古墳時代の包含層である第6・第7層の陸成層はⅢ区以東の現海水準以上の標高にあるのに対して、Ⅳ区には同層準の水成（海成）砂礫層が現海水準以下に分布する。古墳時代の陸地は、本調査区においてはⅠ～Ⅲ区にあり、Ⅳ区以西は海域であったと考えられる。

また、現海岸線の形成時期は第1層の浜堤が示すように、近～現代に求められる。近世～近代の第2層と第3層の堆積物が海側へ前進していることから、この時期にさらに陸地の前進があったものと推定されるが、いずれも砂礫層が主体であり、この時期には潟湖や低湿地の存在は認めがたい。

今回の調査で確認した更新統に属する地層は、Ⅳ区の第10層と阪神高速道路湾岸線試掘調査地点第5・6層であり、両者は対比される。いずれも上位層に不整合に覆われ、第10層を不整合に覆う層は、Ⅳ区では縄文晩期土器を含む時期に、Ⅱ区（段丘崖直下）では、縄文海進最高潮位期以降、縄文晩期までに形成されている。縄文海進期～海退期の削剝が、不整合面形成の主要因を考えてよいであろう。付論の検討によれば、この不整合面の下の地層はMa11層とその上位の砂礫層にあたり、39000年以前とする<sup>14</sup>C年代値からみても、この調査区内にナイフ形石器の時代にあたる低位段丘層が分布する可能性は少ない。

なお、前に報告したナイフ形石器を表採した地点付近には段丘崖が認められず、段丘面から沖積地へ続く緩傾斜面が残っている。この地点については、この分析の適用を保留し、ナイフ形石器の遺跡の可能性を今後の検討課題に残しておきたい。



蛸壺形土器について

1. はじめに

脇浜遺跡からは古墳時代と中世の蛸壺形土器が約950点比較的まとまって出土している<sup>(2)</sup>。ここでは『前報告』<sup>(3)</sup>や今回の報告と重複する点も多いが、出土した蛸壺形土器を概観し、コップ形の土師器飯蛸壺のあり方についてまとめることにする。

2. 飯蛸壺

飯蛸壺はいわゆるコップ形のもの、釣鐘形のものに分かれる。先ずコップ形の飯蛸壺の分類を行う。

分類は底部の形態に注目して、

I類 平底

II類 平底で底部に穿孔のあるもの

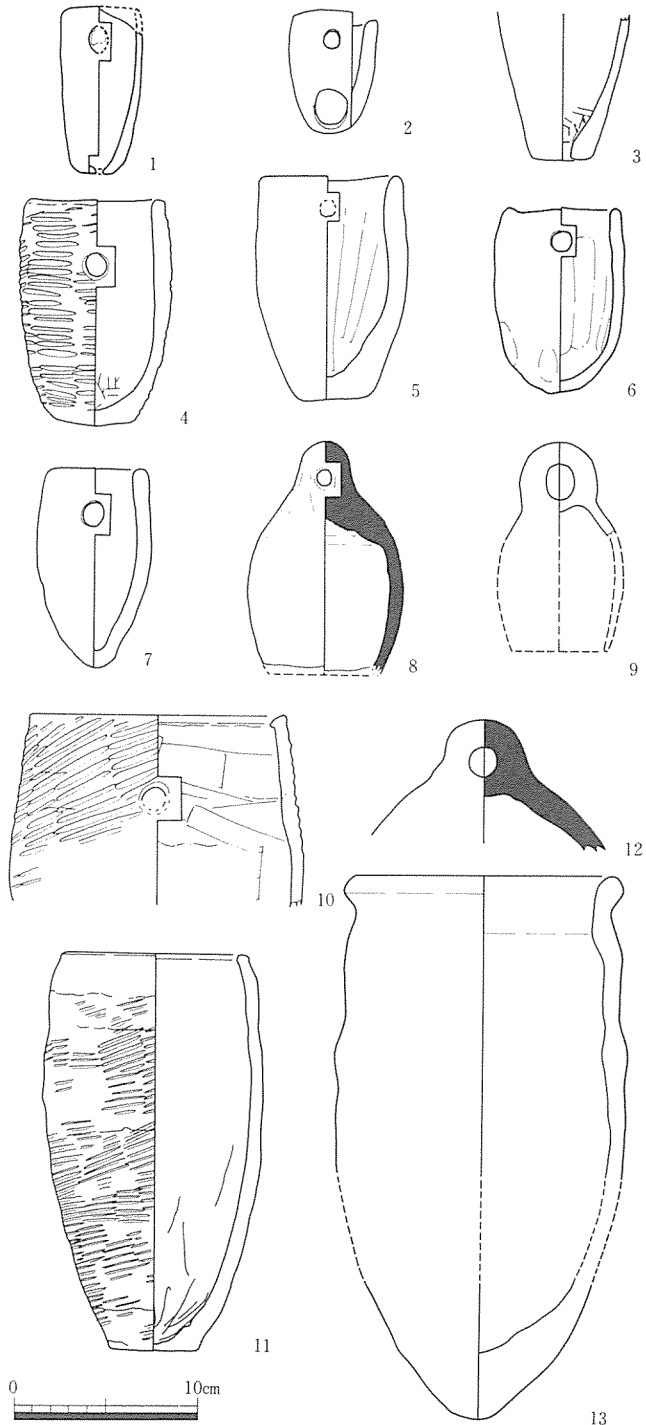
III類 丸底

IV類 尖底

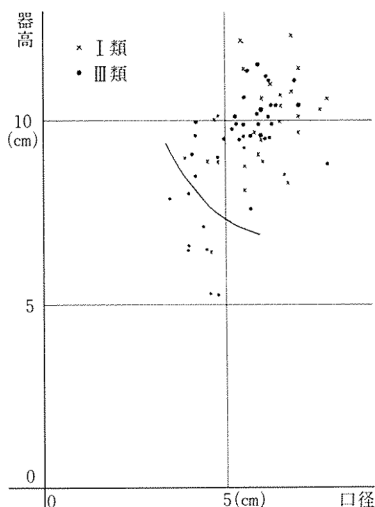
の4つに分ける。

さらに、外面調整から

a類 外面をナデ調整するもの。



第17図 脇浜遺跡出土の蛸壺形土器



第2表 飯蛸壺法量グラフ

I a類 (第17図(5))約50点、I' a類 (第17図(1))1点、I b類 (第17図(4))約50点、II a類 (第17図(3))2点、III a類 (第17図(6))約70点、III' a類 (第17図(2))約5点、IV a類 (第17図(7))約20点がそれぞれ出土している。全体の量としては、III a類がもっとも多く、I a類、I b類と続き、II a類は非常に少ないという傾向を示す。

ここで整理段階で観察した事項をまとめておく。

(1) 小型品の中には紐を通すための穴のある側の、底部から体部下半部に摩滅によると思われる穴の開く例が3点ほど出土している。その内2点は穿孔のある反対側の口縁部が低くなっている(第17図(2))。このような形状の飯蛸壺は、小型品に限られるが、管見の限り他の遺跡での出土を知らない。蛸壺漁に伴う祭祀にでも使われたのであろうか。

(2) 火を受けて赤色を呈する例も認められる。

(3) 口縁部が僅かに欠けているものが多く見られる。使用時に飯蛸壺どうしが当たったため欠けたのであろう。この現象は須恵器の釣鐘形においても認められる。

これらの飯蛸壺は、前回の調査では良好な状況とは言えないが88-OR、91-OR肩部からまとまって出土している。特に91-OR肩部の土器は、共伴した土師器には型式差は認められるものの、土層の堆積状況を重視し比較的単一の時期と考え、布留式の古い段階を前後する時期として扱った。しかし一緒に出土した製塩土器も、技法・形態等から飯蛸壺同様いくつかに分類され、時期差を表していると考えられているものである。そこで、飯蛸壺の形態差については後で検討する。

b類 外面にタタキを施すもの。

の2つに分ける。

また飯蛸壺の法量を調べると、明瞭に一線を画することはできないが(第2表)、多くは口径5cm以上でかつ器高8cm以上を測る。先の2つの分類の要素を組み合わせ、例えば平底で外面にタタキの施されるものをI b類と表す。そして口径5cm未満かつ器高8cm未満を測る小型の飯蛸壺をI' b類と表すことにする。

土師器のコップ形蛸壺は全部で約700点出土している。その内分類可能なものについてみると、

I a類 (第17図(5))約50点、I' a類 (第17図(1))

一方、釣鐘形のもは約100点出土している。こちらは土師器と須恵器両方見られる。土師器については『前報告』で報告できなかったので一点示しておいたが(第17図(9))、包含層からの出土ばかりで時期は明確でないが、古墳時代と中世のものがあると考えられる。一方、須恵器は古墳時代後期に属する。須恵器、土師器ともに釣り部の形態などから分類が可能であるが、この点については後日まとめた。

### 3. 真蛸壺

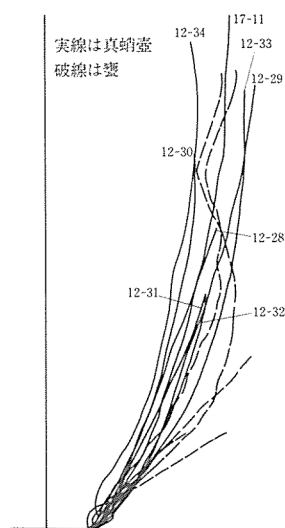
前回調査で1例だけだが体部上半に穿孔をもつもの(第17図(10))が出土しており、脇浜遺跡に真蛸壺は存在する。第18図 土器傾き比較図 復原口径は13cmを測り、体部にはタタキ目が見られる。第12図(26・27)に示した土器も、破片のためたまたま体部の穿孔部分が残っていないだけであろう。

また第12図(28～34)のような底部についても真蛸壺と考えている。それはこれらの土器の方が、壺・甕・鉢の底部から体部にかけての傾きより急傾斜であり(第18図)、先ほどの第12図(26・27)につながる形態と言えるからである。

底部には穿孔する例としないものがあり、底部穿孔の方法も、平底を作ってから焼成前に穿孔する場合と、最初から底部中央に穴が開くように粘土紐を巻き上げていく場合とがある。後者には内面の底までへら状工具による調整痕が残っており、後に剝離したわけではない。

この様にみると真蛸壺は基本的に、体部上半に穿孔があり、底部には穿孔のあるものもないものの二種類が存在したと考えられる。外面調整はタタキを施すものと、ナデを行うものがある。

さらに第17図(11)に示す土器も真蛸壺の可能性を考えている。現在のところ、ほぼ完形品は2例確認しており、口径10cm前後、器高22cm前後を測りやや小さい。しかも体部上半と底部に穿孔がみられず、『前報告』にも示したが、幅5cmにわたりタタキ目が擦り減っている。これは使用による摩滅の可能性を考えている。体部に穿孔がないと、紐との緊縛方法が問題になる。例えば体部に紐を何重にも巻き付ける等の工夫がなされたと考えたい。ここで体部に穿孔のないものも蛸壺として用いられた可能性を指摘しておきたい。<sup>(5)</sup>



第18図 土器傾き比較図

真蛸壺も、約100点出土しており、飯蛸壺と同じ時期と考えている。

いずれにせよ真蛸壺は他遺跡を見ても資料が少なく、分類等は今後資料の増加を待って検討してみたい。

釣鐘形の真蛸壺は2点出土している（第17図(12)）。須恵器であるが、破片のため全体の形状等は明らかではない。

中世以降の真蛸壺としては砲弾形のものがある。いずれも口縁部は外反しており、体部は直線的にのび、尖り底のものばかりである。約50点を確認している。

#### 4. コップ形飯蛸壺の様相

コップ形飯蛸壺は、弥生時代中期以降大阪湾沿岸の多くの遺跡から出土しており、その出土遺跡は、泉州地方だけでも20をこえる。

ここで、泉州地方を中心に他の遺跡の状況を見てみることにする。

堺市四ツ池遺跡は海岸から1.5km離れた低位段丘から沖積平野にかけて立地している。弥生時代中期に属するものとして溝S F0211からⅢ a類が出土している。さらに、庄内式期の竪穴住居址S A01からも、Ⅲ a類が出土し、古墳時代の自然河川からはⅢ a・Ⅳ a類が、出土している<sup>(6)</sup>。なお堺市域ではこの他に菱木下遺跡（弥生時代中期・Ⅲ a類<sup>(7)</sup>）、万崎池遺跡（弥生時代中期・Ⅲ a類<sup>(8)</sup>）等で出土している

高石市羽衣砂丘遺跡は現在でこそ海岸線より0.5kmの所にあるが、埋め立て前は海岸部の砂丘上に立地している。幅1mの溝状遺構より弥生時代後期から布留式の土器と共にⅢ a類が出土している<sup>(9)</sup>。

和泉市・泉大津市池上・曾根遺跡は海岸から1.4km離れた低位段丘に立地する遺跡である。弥生時代中期初頭から後期にかけての飯蛸壺が約2000点ほど出土している。報告書によれば中期初頭には数は少ないが、既にⅠ a類・Ⅲ a類がみられ、中期中頃からはⅢ a類が急にその量を増大させる。また小型のものが現れ法量にバラエティがでてくる。続く中期後半～後期に属する14号土器堆積からは、59点の飯蛸壺がまとまって出土している。内容は前段階と大きく変わらないが1点だけⅠ a類が混じっているのが注目される。後期になると釣鐘形も出土している<sup>(10)</sup>。管見の限り弥生時代のもはこの例しか知らない。

和泉市府中遺跡は、海岸より3.0kmの所に所在する。布留式期の溝S D09上層よりⅠ a類が出土している<sup>(11)</sup>。この周辺では高地性集落として著名な観音寺山遺跡（弥生時代中期末～後期初頭<sup>(12)</sup>）、和気遺跡（弥生時代後期・Ⅰ b類<sup>(13)</sup>）、古池北遺跡（庄内式期・Ⅰ b類<sup>(14)</sup>）等

でも出土している。

岸和田市土生遺跡は、海岸から2 kmの所に立地している。庄内式期のA地区・溝よりⅢ a類が出土している。<sup>(15)</sup>岸和田市域では軽部池西遺跡（弥生時代中期・Ⅲ a類）、<sup>(16)</sup>栄の池遺跡（弥生時代中期・Ⅲ a類）、<sup>(17)</sup>下池田遺跡（弥生時代中期・Ⅲ a類）<sup>(18)</sup>等でも出土している。

泉州地方以外の遺跡についても若干見てみることにする。大阪市加美遺跡では、第14号方形周溝墓の周溝内からⅢ a類が出土している。河内地方でも弥生時代中期以降飯蛸壺は出土しているが、<sup>(19)</sup>現在の所はⅢ a類ばかりである。

兵庫県神戸市玉津田中遺跡では、弥生時代中期中頃から後半のⅢ a類が数多くみられる。蛸壺土壇と呼ばれている1号土壇では約70個体が出土しているが、<sup>(20)</sup>ほとんどがⅢ a類である。

兵庫県播磨町大中遺跡では、第1土器群と呼ばれるところからはⅠ a類を中心に、Ⅲ a類も一部にみられ合計100個体ほど出土している。また第8号堅穴住居址からはⅢ a類・Ⅰ a類が出土している。<sup>(21)</sup>土壇1からはⅠ a類とⅠ b類が共に出土しており、この他にⅡ a類も出土している。<sup>(22)</sup>何れも時期は後期後半である。

以上飯蛸壺を出土した遺跡の状況を概観したので簡単にまとめる。

先ず分布を見ると、海岸部に立地する遺跡から、海岸より数十キロ離れたところに立地する遺跡（奈良県尺度遺跡等）<sup>(23)</sup>までその量に違いはあるものの、出土する遺跡は広範囲に及んでいる。この状況は製塩土器を出土している遺跡のあり方と類似する。<sup>(24)</sup>なお、泉南地域から和歌山にかけての海岸部ではほとんど出土しない。

次に時期的変化について見るが、すでに飯蛸壺は弥生時代前期に出現し、前期は平底、中期は丸底、後期は尖底という大きな流れが示されている。<sup>(25)</sup>泉州地方では、確実に前期に遡る例は認められず、池上遺跡の中期前半が最も古い例である。出現期に既にⅠ類とⅢ類則ち平底と丸底がみられ、その後は主体となる形態は時期によって変化しているようで、弥生時代中期Ⅲ a類、弥生時代後期はⅠ b類が主流をしめている。庄内式期、布留式期になると資料が少なくなるが、庄内式期にはⅠ b類・Ⅲ a類、布留式期にはⅠ a類が存在する。また、大中遺跡での状況を加味すると形態差が必ずしも時間差を表していないといえる。つまり脇浜遺跡で飯蛸壺にバラエティがあるという点も、限られた時間の中の形態差である可能性があり、そのまま単純に時期差に置き換えることはできない。

今回は泉州地方を中心にみてきたわけで、今後は河内、摂津、播磨地方にも広げ大阪湾

岸全体について検討してみたい。

## 5. おわりに

脇浜遺跡は、泉州地方の海岸部に立地する遺跡の中でも本格的に調査された数少ない遺跡である。そして海岸部に立地することを特徴づける、製塩土器、蛸壺形土器、土錘等が比較的まとまって出土した。本稿では飯蛸壺のあり方を中心に述べたが、この場所での製塩活動や蛸壺漁を始めとする漁撈活動が古墳時代前期以降行われたことが判明した。土師器は各器種揃っており、この近辺に一時的であれ集落が存在したこと想定でき、土器の出土地点から考えると91-OR肩部の北西部がその可能性が強い。しかも河内、吉備、東海地方の影響を受けた土器が出土しているということは興味深い事実である。脇浜遺跡における、この時期の集落と製塩活動・漁撈活動の関係の解明は今後の調査成果に期待したい。

- 註 (1) 豊田兼典「脇浜遺跡の地形環境」(財)大阪府埋蔵文化財協会『脇浜遺跡』1986  
(2) 2年間にわたる出土数を合計したものである。  
(3) (財)大阪府埋蔵文化財協会『脇浜遺跡』1986  
(4) 広瀬和雄「遺物」(大阪府教育委員会『岬町遺跡群発掘調査概要』)1978  
(5) 民俗例では、真蛸壺の体部や底に穿孔のあるものとなないものがあるようである。(瀬戸内海歴史民俗資料館『瀬戸内海及び周辺地域の漁撈用具と習俗』1978)  
(6) 四ツ池遺跡調査会『四ツ池遺跡 その1』1973  
堺市教育委員会『四ツ池遺跡』1984  
(7) (財)大阪文化財センター「菱木下遺跡」(『府道松原泉大津線関連遺跡発掘調査報告書』)1984  
(8) (財)大阪文化財センター「万崎池遺跡」(註(7)文献)1984  
(9) 高石町公民館『羽衣砂丘遺跡調査報告』1959  
(10) (財)大阪文化財センター『池上遺跡 第2分冊 土器編』1979  
(11) 大阪府教育委員会『府中遺跡発掘調査概要』1985  
(12) 観音寺山遺跡調査団『観音寺山遺跡調査概報』1968  
(13) 大阪府教育委員会『和気遺跡発掘調査概要報告書』1985  
(14) 大阪府教育委員会『大園遺跡・古池北遺跡発掘調査概要』1978  
(15) 岸和田遺跡調査会『土生遺跡第2次発掘調査概要』1975  
(16) 大阪府教育委員会『軽部池西遺跡試掘調査概要報告書・II』1985  
(17) 岸和田遺跡調査会『栄の池遺跡』1979  
(18) 岸和田遺跡調査会『下池田遺跡第2次発掘調査報告』1987  
(19) 桜井久之「加美遺跡」(埋蔵文化財研究会第19回研究集会世話人会編『海の生産用具』)1986  
(20) 中川渉・甲斐昭光「玉津・田中遺跡」(註(19)文献)1986  
(21) 播磨町教育委員会『播磨大中』1964  
(22) 播磨町教育委員会『播磨大中遺跡発掘調査報告書』1985  
(23) 石野博信「大和の弥生時代」(『橿原考古学研究所紀要』2)1973  
(24) 酒井龍一氏は製塩土器を出土する遺跡の立地の分類を行ったが、製塩土器の分布と類似する。(豊中・古池遺跡調査会『豊中・古池遺跡発掘調査概報』1976)  
(25) 森浩一「大阪湾岸の飯蛸壺形土器とその遺跡」(『古代学研究』第2号)1950

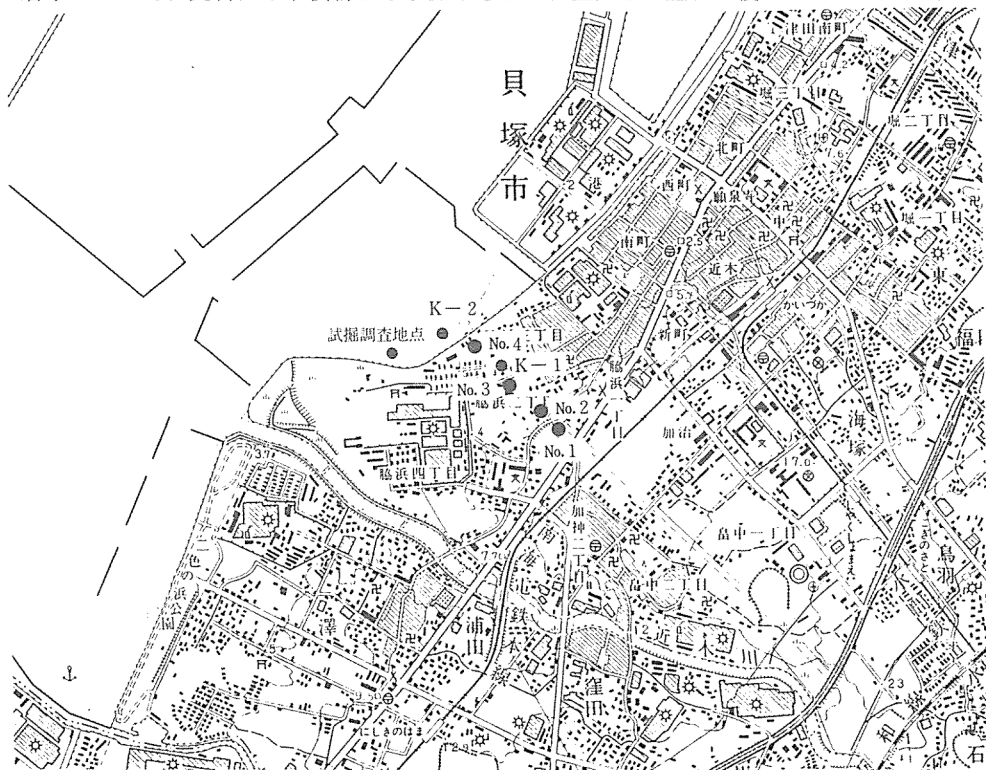
## 付 論

はじめに

今回報告のうち、1986年度調査では花粉分析、珪藻分析に加えて火山灰分析を実施した。さらに1987年度夏の調査では、土層を鉛直方向に連続的に採取し観察することを目的としたオールコア・サンプリングのためのボーリングを行い、この土層なかの良好な試料について花粉、珪藻、火山灰等の分析を実施して、各地点の層相対比と、堆積年代等の分析を試みた。ボーリング地点及び、試料採取地点は第19図に示したとおりである。

今回実施した、各分析、調査についてその経緯を略記しておこう。

『前報告』に掲載した花粉等の微化石分析は主に平安時代以降の地層が対象となり、古墳時代以前の地層についての分析は不十分なところがあった。その反省から1986年の調査では、前報告で脇浜遺跡における縄文晩期以前の地層として、「基盤となる層」と呼んだ層準について、更新世の堆積物との予測のもとに、上位を不整合で覆われているⅣ区第10



第19図 花粉・珪藻・火山灰分析試料採取位置図

層の粘土層（10c層）で花粉分析、珪藻分析を行った。また、阪神高速道路湾岸線建設予定地内の試掘調査（第15図）の際にも、T.P.-4.5m以下に不整合面をもつシルト層（第5層）を確認し、貝塚中央線内Ⅳ区10層との対応を想定して花粉、珪藻、火山灰等の分析を行った。試掘地点での分析は第3層以下の無遺物層を対象とした。

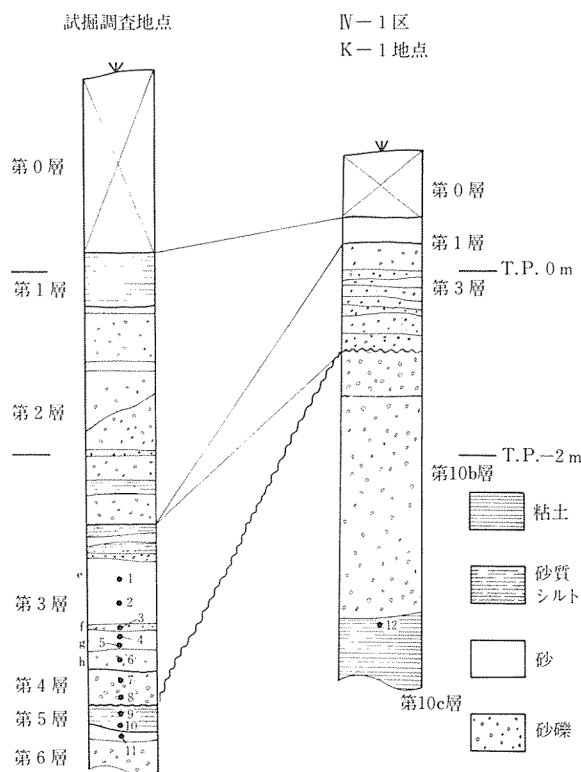
一方、こうした検討を加えながらも、この不整合面をもつ地層が、「高・中・低位」とに区分されている更新統堆積物のどの層準に対応するのか、仮に、低位段丘相当層より古い堆積物としても、その不整合面直上に後期旧石器時代～縄文時代の地層がシールされている可能性がないかどうか、論ずべき根拠をもつことができなかった。

1987年夏の調査は、このような観点を背景にして、脇浜地区の沖積層の下にある不整合面をもつ更新統の地層の広がり、さらにこの地層との対応を明らかにすることを目的として、ボーリング調査を実施した。

ボーリング地点は、海岸線に対して直交方向の断面図を想定できるように、台地のの上1

ヶ所、海側沖積地3ヶ所の計4ヶ所を選び、深さは最深で地表下33mまで達している。

コア・サンプルは一部の礫層で採取不能であったが、全ての地点で海成層を確認することができた。これらの試料については、コアを縦方向に半截して、1/2を保存し、残り1/2のコアから分析試料を採取した。分析は花粉、珪藻、火山灰の他、<sup>14</sup>C測定結果も得られた。紙数の関係から本報告では略報とするが、詳細については改めて機会を持つことにしたい。



第20図 分析試料採取層位図



# 1. 脇浜遺跡花粉・珪藻・火山灰分析報告

川崎地質株式会社

## まえがき

試掘調査に伴って試掘坑壁より採取された試料を対象として、花粉分析（12試料）、珪藻分析（12試料）ならびに火山灰分析（5試料）を行い、地質層序ならびに植生や水域の古環境の推定を行った。

## 1. 分析試料

### （1） 分析試料の採取地点・土層

分析試料の採取地点は、脇浜遺跡試掘調査地点と脇浜遺跡Ⅳ区（第19図）である。

試料は試掘調査地点北側断面より花粉・珪藻の11試料と火山灰の5試料、脇浜遺跡Ⅳ区土層断面より花粉・珪藻の1試料を採取した。（第20図）

### （2） 土層の区分と試料の位置づけ意義

試掘地点北側における、第1層～第4層は壁面の観察結果より沖積層と推定されるが、第5層以下は所属不明で、洪積層ではないかと推定された。一方、脇浜遺跡Ⅳ区の試料No.12も洪積層と推定された。

### （3） 微化石・火山灰の含有状況

花粉・珪藻の両分析の抽出処理を行ったところ、花粉で11試料、珪藻で2試料から結果が得られた。火山灰分析では1試料から火山ガラスが検出された。

## 2. 分析方法

### （1） 花粉分析の方法

分析処理は、分散→粗粒鉍物除去→振動マイクロフィルター（細粒物除去）→化石の濃縮→フッ化水素酸処理→重液分離→アセトリシス処理→プレパラートの順で行った。プレパラートを顕微鏡により400～1000倍率で観察し、メカニカルステージによる帯分析を行って、結果を花粉ダイアグラムに表示した。

### （2） 珪藻分析の方法

分析処理は、試料の乾燥と粉砕→過酸化水素水処理→ピロリン酸ナトリウム処理→酸処

理→振動フィルター（細粒物除去）→濃縮→プレパラートの順で行った。

### （3） 火山灰分析の方法

全鉱物組成分析、重鉱物組成分析と火山ガラスの屈折率測定ならびに形態分析をおこなった。火山ガラスの屈折率は浸液と波長可変光源を併用して標準ガラスをもちいて行った。

## 3. 分析結果

### （1） 花粉分析結果の概要

検出された花粉化石は、50種類であって、これらのうち、花粉組成を特徴づける種類は以下のものである。

① 卓越樹木花粉：アカガシ亜属、コナラ亜属、ニヨウマツ亜属、モミ属、ツガ属、スギ属、コウヤマキ属、ハンノキ属

② 卓越草本花粉：イネ科、イネ科 (>40)

③ 栽培種花粉：イネ科 (>40)、ソバ属

イネ科 (>40) はイネ科のうち、花粉粒径が $40\mu$ 以上のものを示しており、イネ属(*Oryza*)を含んでいると考えられるが、そのすべてがイネ属であるとは断定できない。

### （2） 花粉組成の変遷傾向と分帯

#### ① 試掘調査地点の花粉組成変遷と分帯（第22図）

試料No.1~11は第3層から第6層にわたり、花粉組成によって下記のような分帯設定ができる。

##### 1) P 1 帯（試料No.1~8）

ニヨウマツ亜属、アカガシ亜属が卓越し、モミ属、ツガ属、コナラ属、イネ科 (>40)などを伴う。この他、シイ属、エノキ属、ヤマモモ属、イヌマキ属など 完新統（沖積世）を特徴づける種類が出現する。P 1 帯はさらに、試料No.3~8のa亜帯と試料No.1~2のb亜帯に細分できる。a亜帯はアカガシ亜帯が卓越し、モミ属、ツガ属の他、イヌマキ属やシイ属を伴い、暖温帯における自然植生の要素が主体となっている。b亜帯は、ニヨウマツ亜属が卓越し、自然植生要素は激減し、イネ科 (>40)が高い出現率を示す。

##### 2) P 2 帯（試料No.9~11）

スギ属、コウヤマキ属、ハンノキ属が卓越し、P 1 帯の卓越種類はすべてごく低率である。こうした花粉組成は完新統にはみられないものである。

#### ② IV区の花分組成（第21図）

試料No.12は、スギ属が卓越し、ニヨウマツ亜属、トウヒ属、ツガ属などをともなう。これも完新統にはみられない花粉組成である。

### (3) 珪藻分析結果

検出された珪藻化石の種類は、42種類であって、珪藻組成を特徴づける種類は以下のようである。

① 卓越種類：Stephanodiscus niagarae、S.carconensis、Melosira sorida、M.gran-ulataであって、これらはいずれも淡水域の浮遊性の種類である。

② 淡水域以外の種類：海水域もしくは汽水域の種類として、Coscinodiscus sp.Rhop-alodia sp.、Campylodiscus sp.などが検出されたが、いずれも出現個体数は少ない。

### (4) 珪藻組成の特徴

珪藻分析の結果は第23図の珪藻ダイアグラムのとおりである。

試料No.1,2に含まれる珪藻化石は、いずれも珪藻化石殻体が細片化し、種の同定が困難なものが多いが、珪藻組成は、淡水域の浮遊性種を主体とし、付着性もしくは底性の種をまじえる。海水域の種も出現するが、その比率は低い。

### (5) 火山灰分析結果

#### 1) 火山性物質の含有状況

火山灰分析を行った5試料(試料No.5・9(2点)・10・11)のうち、火山ガラス、火山ガラスの付着した本質岩片・鉱物が含まれていたのは、試料No.5の1試料である。

#### 2) 全鉱物組成分析結果

全鉱物組成(粒数%)は、長石が90%以上を占め、火山ガラスは4%、重鉱物は5%である。

試料NO.	火山ガラス	長石	石英	重鉱物(合計)	%
5	4	91	0	5	

第3表 全鉱物組成

#### 3) 重鉱物組成分析結果

重鉱物組成(粒数%)は、角閃石が29%、斜方輝石は6%、単斜輝石4%であり、両輝石石英安山岩質の火山灰層と推定される。

試料NO.	角閃石	斜方輝石	単斜輝石	黒雲母	ジルコン	不透明鉱物	%
5	29	6	4	2	2	56	

第4表 重鉱物組成

#### 4) ガラスの屈折率・形態

屈折率は、1.511~1.514の値を示し、形態は偏平型ならびに中間型を示す。

### 4. 考察

#### (1) 花粉化石による地質層序区分

##### ① 完新統の層序区分

大阪平野地下の完新統における花粉組成の変遷は、下位よりコナラ亜属卓越→アカガシ亜属卓越→ニヨウマツ亜属卓越の連続変化を示す(古谷, 1979)。P 1 帯 a, b の両亜帯に細分され、a 亜帯のアカガシ亜属卓越、b 亜帯のニヨウマツ亜属卓越は上記の変遷にそれぞれ対応するものと考えられる。a 亜帯と b 亜帯の間には顕著な花粉組成変化があり、この間にはアカガシ亜属卓越からニヨウマツ亜属卓越への遷移期間である500~1000年の時間間隙が推定される。

##### ② 更新統

高石市~貝塚市の沿岸部では、Ma12層がT.P.-35m前後に連続し、その上位には、T.P.-5 m前後まで低位段丘堆積層に相当する地層が分布し、脇浜はその南方部に当たり、地下には類似の地質構成が推定されることと、スギ属とコウヤマキ属の卓越する花粉組成を示す例として、泉州沖関西新空港予定海域のMa12層直上の層準があることから、P 2 帯は、中位段丘堆積層の最上部礫層に相当すると考えられる。ただし、低位段丘堆積層相当層においても類似の組成を示す層準が存在するかどうかについては、今後の検討が必要である。脇浜遺跡Ⅳ区の試料No.12の層準は、トウヒ属が出現することなどから低位段丘堆積層に相当する可能性があるが、これについても下位の地層に関する情報が必要である。

#### (2) 火山灰層の対比

脇浜の試料No.5のテフラは、その火山ガラスの屈折率や重鉍物組成からすると、後期更新世~完新世の既知の火山灰層のうち、横大路火山灰層(吉川ほか, 1986)と類似の性質を示す。横大路火山灰層は6700~7000年B.P.の年代であると推定される。また、同層準の花分析試料No.5はアカガシ亜属をはじめとする暖温帯要素卓越時代に相当し、このテフラを完新世の横大路火山灰層と考えることと花粉化石の内容はよく一致する。

#### (3) 堆積環境について

脇浜の試掘坑における試料No.1,2の珪藻組成は淡水域の種が主体ものであるが海水域~汽水域の種類も含むことから、上流の帯水域からの流れ込みが多量にある河口付近で、

海水の影響がおよぶような堆積環境が推定される。

(4) 植生の変遷について

完新統における植生は、亜帯区分に対応して以下のように推定される。

① P1帯 a 亜帯時代

沿岸域を含む平野（低地）にはシイ、カシを中心とするいわゆる照葉樹林（暖温带常緑広葉樹林）の分布が推定される。ヤマモモもこのメンバーである。また、河畔林としては、ニレ属、ケヤキ、エノキを主体とした樹林が分布したものと推定される。

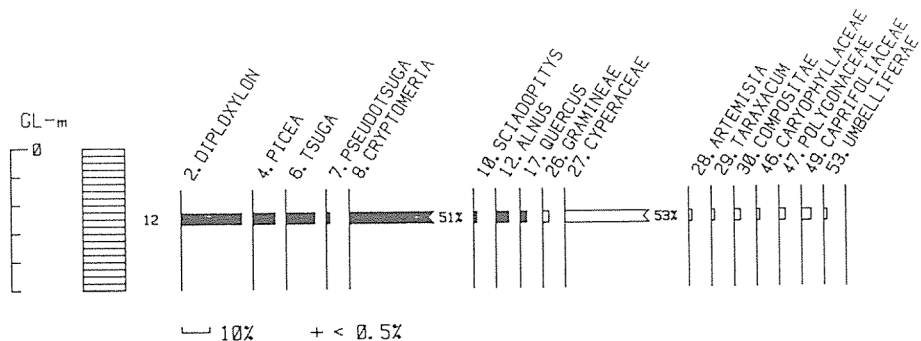
一方、山麓から山地にかけては、いわゆるモミ・ツガ林の分布が推定される。スギ、コウヤマツもこのメンバーである。ブナ属が全く出現しないことから後背の金剛・葛城山地にはブナ林が存在しなかったか、ごくわずかであったと推定される。

② P1帯 b 亜帯時代

a 亜帯の暖温带から中間帯にわたる自然植生要素は激減し、二次林要素であるアカマツ、クロマツ林が拡大したと推定される。ただし、山麓から山地にかけてのモミ・ツガ林要素はその一部が残存し、山地頂部にはブナ林が存在したと推定される。このような劇的な二次林の拡大は、人類による自然林の破壊によるものと考えざるを得ない。

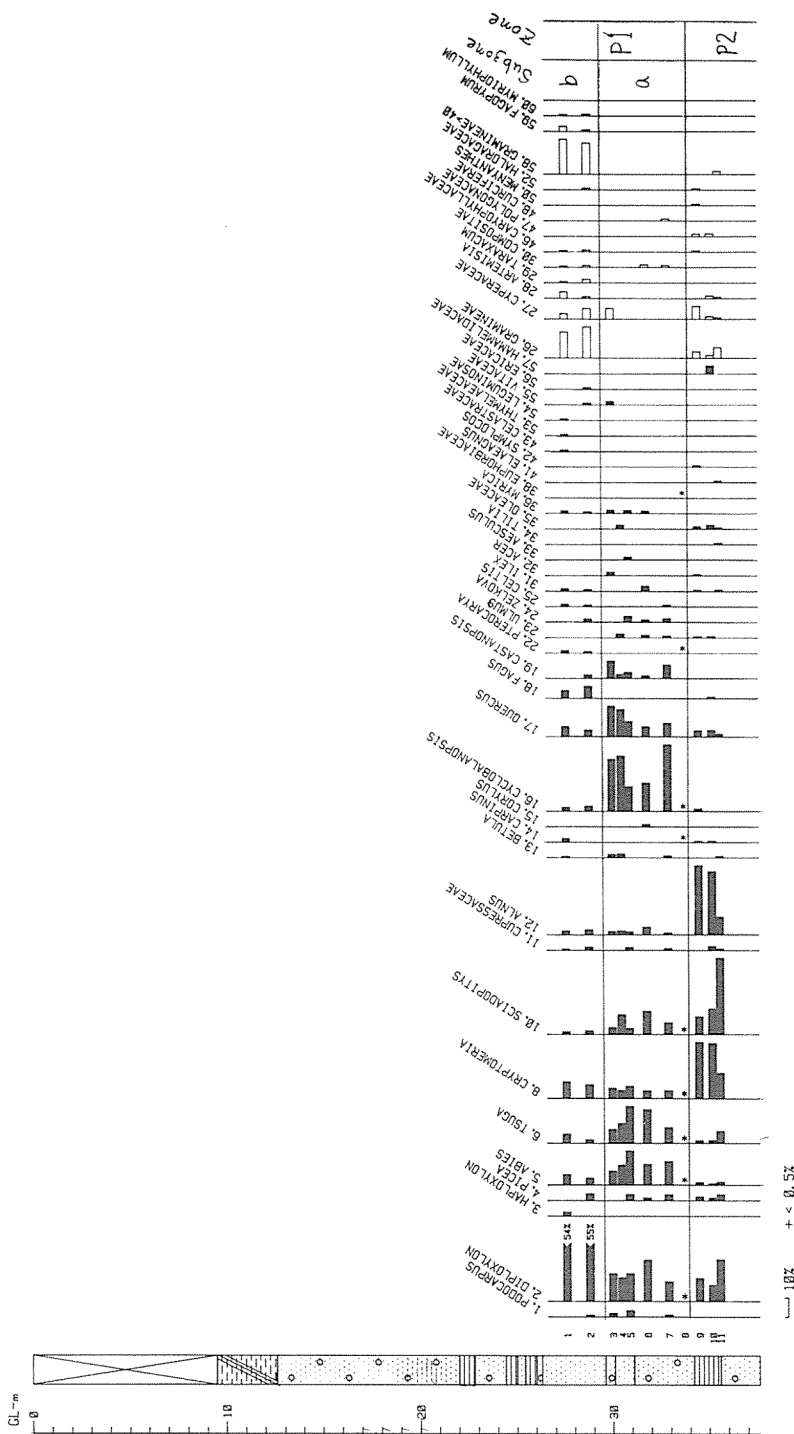
(5) 栽培植物種類の出現

一部のイネ (*Oryza sativa*) を含むと考えられるイネ (>40) とソバは b 亜帯に入って出現する。これらはいずれも後背の栽培地から供給されたものであろう。ただし、イネ (>40) は20%程度の出現率を示し、ソバも連続出現することから、後背地においては活発かつ広い地域にわたる耕作がすでに行われていたものと推定される。このことは上記の二次林の拡大とよく対応している。

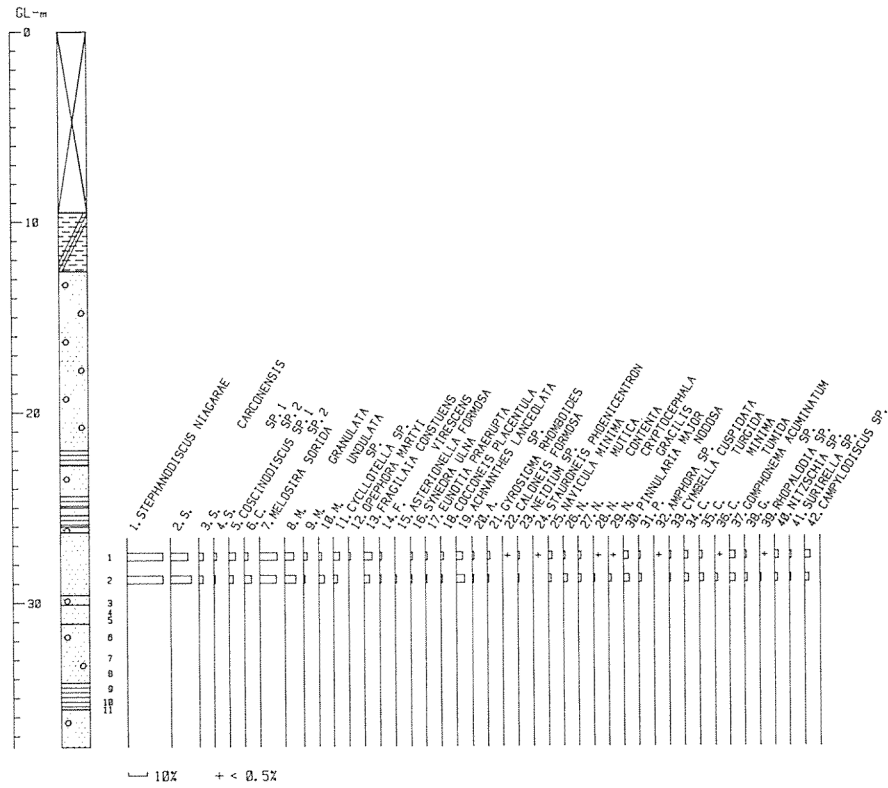


第21図 脇浜遺跡IV-1区花粉ダイアグラム

WAKIHAMA-N



第22図 脇浜遺跡試掘調査地点花粉ダイアグラム



第23図 脇浜遺跡試掘調査地点珪藻ダイアグラム

引用文献

古谷正和「大阪周辺地域におけるウルム氷期以降の森林植生変遷」(『第四紀研究』第18巻 第3号) 1979

吉川周作・那須孝悌・樽野博幸・古谷正和「近畿地方中部に分布する後期更新世～完新世の火山灰層について」(『地球科学』40巻1号) 1986

## 2. 脇浜遺跡試錐地質調査中間報告

川崎地質株式会社

### まえがき

地質調査は、大阪府貝塚市脇浜地内においてボーリング調査を行って、地下に分布する文化財含有層の状況を把握するとともに、ボーリングコアより選択・抽出した試料について微化石等の分析を行って、地質層序、ならびに植生や水域の古環境の推定をするために行った。

### 1 調査の内容

ボーリングによるコア採取は、No.1～4の4地点において行い、その位置を第19図に示す。No.1～4の掘削開始地表面標高ならびに、座標値と掘削深度は第5表のようである。

地 点	標高 (T. P m)	座標値 (第6系)		掘削深度 (m)
		X	Y	
No. 1	10.200	-173046.398	-59477.485	21.50
No. 2	3.750	-172980.088	-59559.893	20.00
No. 3	2.050	-172872.491	-59661.575	28.90
No. 4	1.930	-172749.300	-59788.302	33.00

第5表 ボーリング調査の標高・座標と掘削深度

### 2 ボーリングコアの採取

コアの採取方法は、地質状態に応じて下記の4種類を使い分けた。

- (1) サンドサンプラー (S) による採取
- (2) デニソンサンプラー (D) による採取
- (3) 大型貫入サンプラー (P) による採取
- (4) コアサンプラー (C) による採取

コアの採取率は70%～100%のものが多いが、50%前後のものや、まれに30%～0%のものがあり、採取率が極端に悪いものは、礫質堆積物であるためのサンプラーの貫入不能・



損、試料の脱落などが原因である。

実際の作業は事前チェックボーリング→アンカー孔掘削→反力アングルの設置→掘削とサンプリング→コア抜きと整形→コアの観察記載、写真撮影→保存の順で行った。

### 3 ボーリング調査の結果

#### (1) 調査孔No.1

No.1は標高約10mの段丘面上から採取を行った調査孔である。地表面よりの深度(以下GL-0.70mまでは、レンガ片等の人工物がまじる盛土である。GL-0.70~2.70mは黄色風化して、基質がやや粘土化したペブル~コブル大の礫層であって、全体に縞模様の風化跡がみられる。GL-2.70~5.80mは全体に縞模様の風化をした粘土層であって、観察結果だけからは海成・非海成の判断は困難である。本粘土層の最下部は、垂角礫のまじる不淘汰な堆積物である。GL-5.80~10.50mは、全体に淘汰の悪い砂・礫層であって、GL-7.10~7.50mに砂層を挟在する。GL-10.50~11.90mは、ペブル礫のまじる砂質シルト層であって、中部は汽水成~海成の堆積物である可能性がある。またGL-11.80m付近は凝灰質であると判断される。GL-11.90~13.60mは、ペブル礫のまじる粗粒砂層である。GL-13.60~15.30mは炭化した植物の枝や礫片を含む砂質の粘土~シルト層である。GL-15.30~19.50mは、上部が砂層、下部がペブル~コブル大の円礫層である。GL-19.50~19.90mは、下部が黒雲母を含む中~粗粒火山灰層、上部が凝灰質の粘土層である。GL-19.90~21.30mはシルト質の粘土層で、下部は砂質である。GL-21.30~21.50mは中~粗粒砂層である。

#### (2) 調査孔No.2

No.2は低地部のうち、最も段丘崖に近い位置で採取を行った調査孔である。GL0.00~-0.10mは黄灰色の礫をまじえる砂質層で、埋立土と判断される。GL-0.10~-0.50mは暗褐色の有機物を含む砂質粘土層である。GL-0.50~-1.00mは有機物を多量に含むシルト質砂層である。GL-1.00~-5.00mは砂礫層もしくは礫まじり砂層で、下部は植物質のレンズを挟む垂角礫まじりの砂層、中部は暗灰色のバンドを挟む礫まじり砂層、上部は淘汰の良い中粒砂主体層である。GL-5.00~-7.75mは砂質粘土層ならびに砂層と礫層の互層であって、粘土は淡水成堆積物と推定される。GL-7.75~-8.75mはシルト層と砂層の互層であって、シルト層は多量の炭化した植物質を含み、砂層は粗粒砂である。GL-8.75~

-9.10mはペブル礫を主体とする礫層である。GL-9.10~-11.45mはラミナの発達する砂層主体層であって、上部は粘土質である。GL-11.45~-15.00mは、ペブル礫にコブル礫をまじえる礫層であって、下部は亜角礫を含み淘汰が悪い。GL-15.00~-15.40mは凝灰質の粘土層で細かい割れ目が発達する。GL-15.40~-15.90mは黒雲母を多く含む粗粒火山灰層である。GL-15.90~-17.20mは、淡緑灰色の均質な粘土層で、細粒砂のラミナが発達する。GL-17.20~-19.95mは海成と判断される粘土層であって、上部は均質、中部はカキ殻が密集し、下部は貝殻片が点在する。GL-19.95~-20.00mは砂質粘土層である。

### (3) 調査孔No.3

No.3は低地部のうち、No.2と0.4の中間地点で採取を行った調査孔である。GL0.00~-0.85mは上部が均質、下部が粘土質の、レンガ片などを含む埋立土である。GL-0.85~-1.40mは有機物を含む礫まじり粘土層であって、下部10cmは上下に有機物を含む薄層を伴った古い土壤層である。GL-1.40~-1.75mは赤褐色の中粒砂層である。GL-1.75~-2.50mは縮まりの緩いコブル礫まじりの砂層である。GL-2.50~-3.00mは有機物を含む細~中粒砂で、上部は汽水成の可能性がある。GL-3.00~-5.00mは、やや縮ったグラニュール礫主体の礫層である。GL-5.00~-6.90mは砂層と粘土層の互層である。GL-6.90~-7.80mは砂まじりの粘土層でサンドパイプが発達し、カキ殻を含む。GL-7.80~-8.00mは黄緑灰色の固化した火山灰層である。GL-8.00~-8.20mは礫まじりの粘土層である。GL-8.20~-14.50mはグラニュール礫を主体とする礫層で、GL-12.00~-12.50m付近は粘土質であり、GL-13.00~-13.30m付近に有機物を含む。GL-14.50~-15.85mは砂まじりの粘土層である。GL-15.85~-16.40mは黒雲母を含む粗粒火山層である。GL-16.40~-18.10mは砂層および粘土層である。GL-18.10~-19.45mは上部が植物質を含み、下部がカキ殻を含む粘土層である。GL-19.45~-23.00mは均質な海成粘土層で部分的に貝殻を含む。GL-23.00~-24.80mは多量のカキ殻を含む粘土層である。GL-24.80~-28.50mは上部にカキ殻を含み、下部は均質な海成粘土層である。GL-28.50~-28.85mは亜角礫がまじる粘土層である。

### (4) 調査孔No.4

No.4は低地部の最も海寄りでは採取を行った調査孔である。GL0.00~-0.50mはペブル礫のまじる砂質粘土層である。GL-0.50~-4.75mはペブル礫のまじる中~粗粒砂層である。

GL-4.75～5.50mは貝殻片をわずかに含む砂層である。GL-5.50～7.00mは淘汰の悪い、締った粗粒砂層であり、ペブル～コブル礫をまじえる。GL-7.00～7.55mは植物質を多量に含む炭質粘土層である。GL-7.55～8.50mは均質な粘土層である。GL-8.50～9.10mは粗粒砂主体の砂層である。GL-9.10～10.50mは下部に植物質を含む粘土層である。GL-10.50～11.15mはカキ殻を多量に含む粘土層である。GL-11.15～12.50mはシルト質の粘土～砂層で、上部に火山灰のブロックを含む。GL-12.50～13.20mは多量の植物質をラミナ状に含む粘土層である。GL-13.20～14.20mは礫まじりの砂層である。GL-14.20～15.25mは砂をラミナ状に挟み礫をまじえる粘土層である。GL-15.25～17.35mは上部が砂層、下部が淘汰の悪い礫層である。GL-17.35～18.60mは砂質の粘土層で上部は凝灰質である。GL-18.60～19.60mはグラニユール礫主体の砂・礫層である。GL-19.60～20.30mは緑青灰色の粘土層である。GL-20.30～21.80mは多量のカキ殻を含む粘土層である。GL-21.80～23.30mは貝殻片の点在する粘土層である。GL-23.30～24.10mは礫もしくは砂をまじえる粘土層である。GL-24.10～25.10mは植物質をわずかに含む粘土層である。GL-25.10～27.90mは細砂のラミナを伴う均質な海成粘土層である。GL-27.90～28.80mは砂のラミナが発達する粘土層である。GL-28.80～30.90mはわずかに貝殻片を含む海成粘土層である。GL-30.90～32.45mは植物質を含む粘土層である。GL-32.45～33.00mは粘土を混えるペブル礫主体の礫層である。

#### 4 地質状況のまとめ

##### (1) 岩相の分布と連続

No.1～No.4の調査ボーリングならびに、既存資料（K-1、K-2）に基づいて作成した岩相の分布・連続状況は、地質断面図（第24図）のように推定される。

調査地の地下約30m以浅に分布する地層のうち、その連続を考える手掛りとなるのは、出現する4層の海成層（M1～M4）と中部に挟在される厚さ約50cmの火山灰層である。

貝殻を含むなど岩相上海成層の特徴を示す地層は、No.4において標高で-3.00m付近の貝殻まじり砂層（M1）、-8.50～-10.00m付近（M2）、-18.00～-21.00m付近（M3）、-23.00～-30.00m付近（M4）の4層である。

No.2とNo.3には、M3の上位約2mに上述の火山灰層（T2）があり、さらに、No.3とNo.4にはM2の下部に厚さ最大20cmの火山灰層（T1）が挟在される。

以上の海成層ならびに火山灰層を鍵層として地層の連続を追跡すると、M1はNo.4のみ

にM2はNo.3～No.4に、M3はNo.2～No.4に、M4はNo.3～No.4に、T1はNo.3～No.4に、T2はNo.1～No.3にそれぞれ追跡される。

以上の地層の連続状況の推定から、下記のような岩相層序区分がまとめられる。

- ① M3より下位には、厚さ約3mのM3および厚さ約8mのM4の2層の海成層を挟在する粘土層卓越層が分布する。
- ② M3とM2の間の層準は厚さ8～9mの2～3層の礫層と粘土層の互層が分布し、その下部にT2火山灰層を挟在する。
- ③ M2は厚さ0.5～1.5mの厚さの海成層で、その下部にT1火山灰層を挟在する。
- ④ M2とM1の間の層準は厚さ4～5mの2層の礫層と1層の植物質粘土層が分布する。
- ⑤ M1は厚さ0.25～0.40mの海成砂層である。
- ⑥ M1の上位には、厚さ1～4mの礫層・砂層・粘土層が分布する。
- ⑦ No.1においては、標高-0.30～-0.70m付近にM2に連続すると考えられる粘土層があり、その上位は下位より順に厚さ約5mの礫層、厚さ約2.6mの風化した粘土層、厚さ約2mの礫まじり砂層が分布する。

## (2) 層序区分

泉州沿岸部の湾岸部地質調査資料を参考にすると、微化石分析等を行う前の事前の予察的判断として、各海成層は以下のような層序対比になると考えられる。

M1    . . . . . 完新統  
M2    . . . . . Ma11層  
M3    . . . . . Ma10層  
M4    . . . . . Ma9層

つまり、この付近の低地部にMa12層は発見されていない。

この事より、No.1において、M2(Ma11層と推定)の上位約5mに発達する厚さ2.6mの粘土層は、Ma12層に相当する海成層である可能性がある。この付近の段丘が中位段丘堆積層(市原ほか、1986)であることと、Ma12層は中位段丘堆積層(上町累層)に対比される考え(古谷、1978)もこの可能性を示唆する。

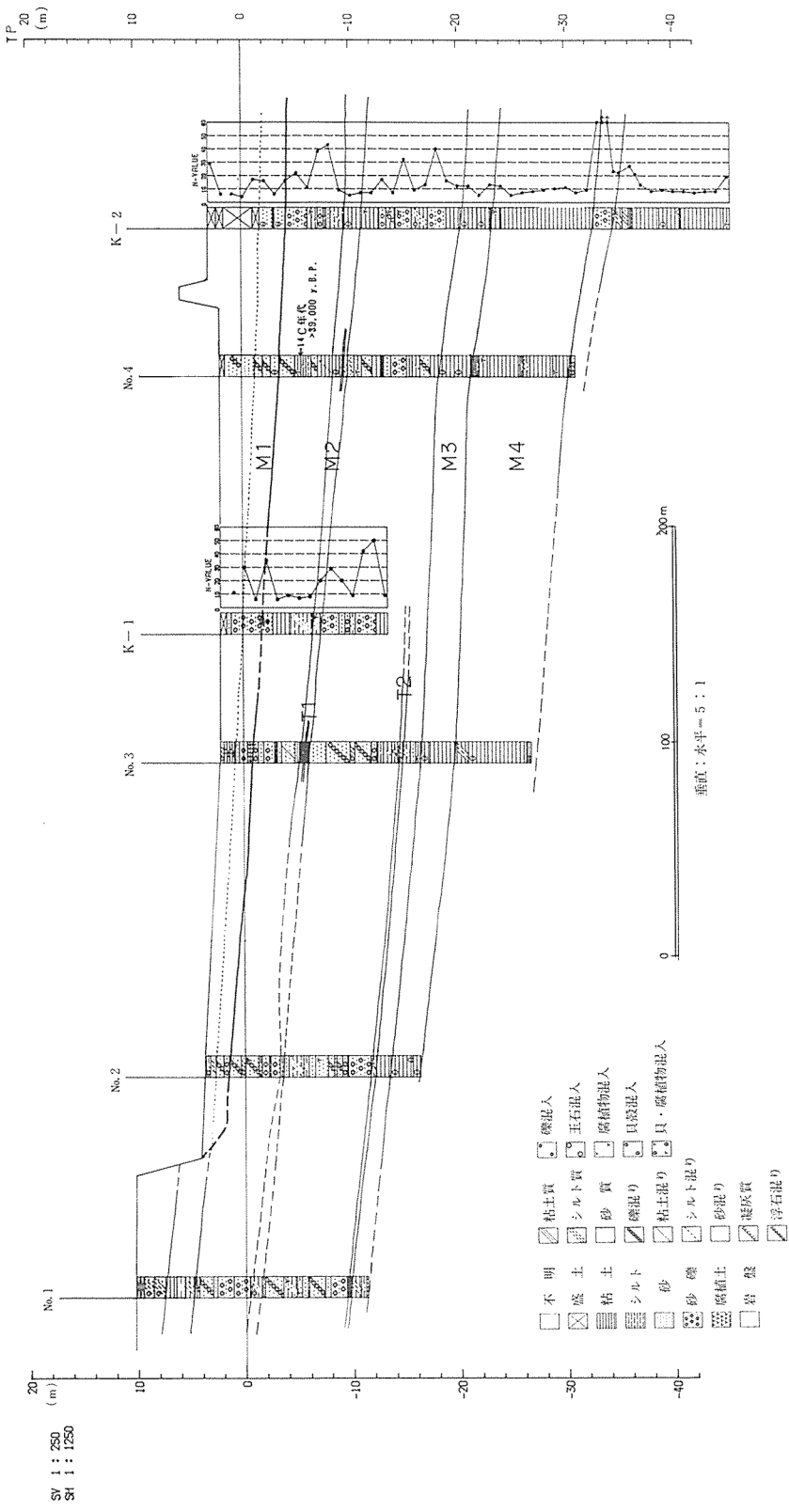
M2(Ma11層と推定)の上位には、低地部においてM1との間に植物質に富む粘土層とその上下の礫層が分布するが、GL-7.00～-7.55mは植物質を多量に含む炭質粘土層のうち、GL-7.30～-7.35mの試料の<sup>14</sup>C年代測定を行ったところ、>39,000y.B.P.であった。

したがって、植物質に富む粘土層は低位段丘堆積層ではなく、M2に連続する堆積物である可能性が大きい。

完新統はこれらの地質を不整合に覆っており、M1の基底が完新統の下限となると考えられる。

記号	岩相区分	特徴
M1	海成砂層	最上部に盛土 土壌性の堆積物 下部に貝殻まじりのルーズな砂層
	礫・砂互層	植物質に富む粘土層を挟在する 礫層は2層に区分される 下部は砂質層
M2	海成粘土層	T1火山灰層を挟在
	礫・砂互層	不淘汰な礫層の間に 比較的淘汰の良い中～細粒 砂層を挟在
	淡水成粘土層	砂質の粘土層
T2	火山灰層	黒雲母に富む
	淡水成粘土層	砂質粘土層もしくは砂層
M3	海成粘土層	上部にカキ殻の密集帯あり 全体に貝殻片を含む
	淡水～汽水成粘土層	植物質を含む
M4	海成粘土層	貝殻は細片が混入する程度で 全体として均質な粘土層 細粒のラミナが発達

第6表 No.3を代表とする調査地域の岩相層序



第24図 地質断面図

SV 1 : 250  
SH 1 : 1250

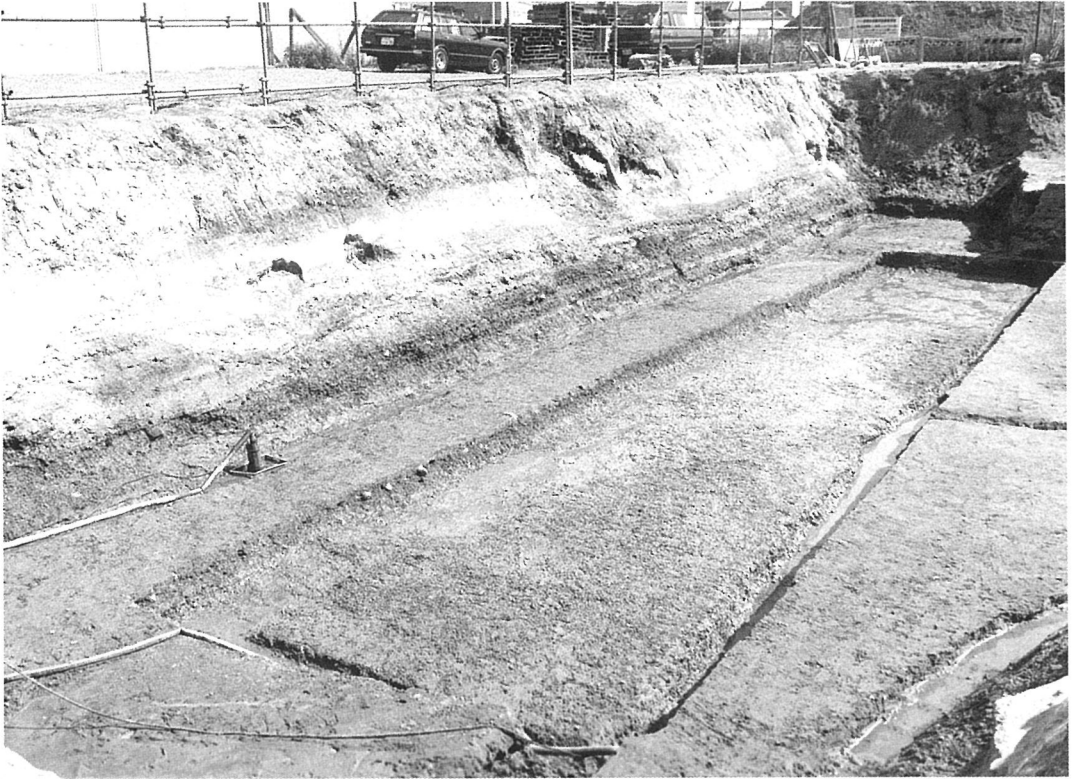
圖

版

図版一 脇浜遺跡周辺空中写真



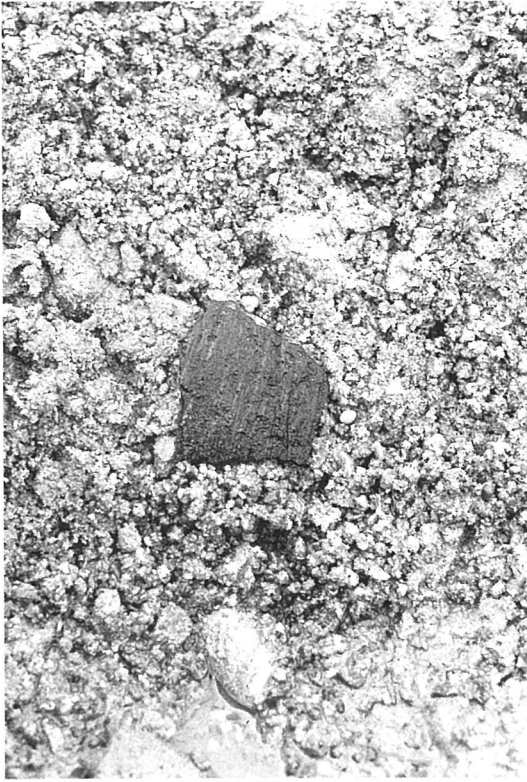




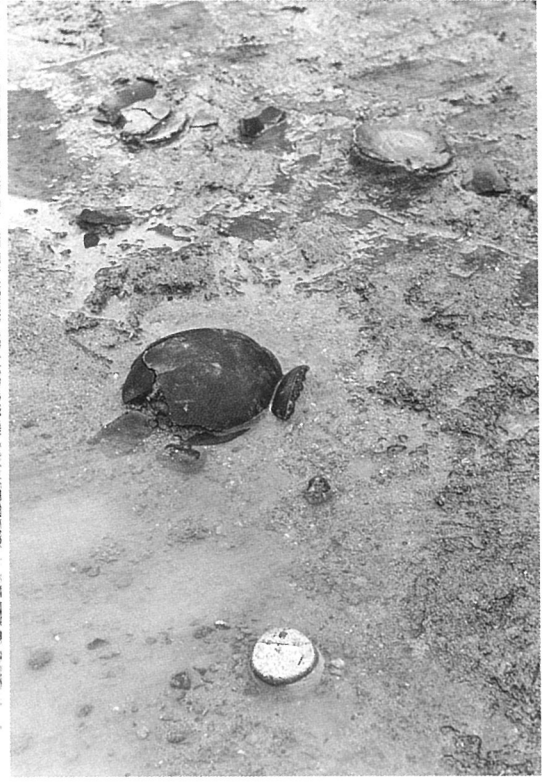
北東壁断面（全景）



北東壁断面（部分）



縄文土器出土状態



土師器出土状態



飯蛸壺出土状態



須恵器出土状態



調査区近景



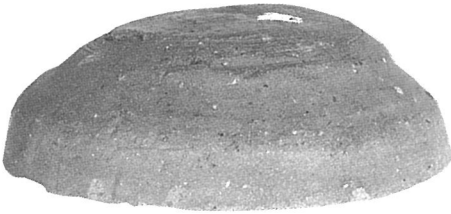
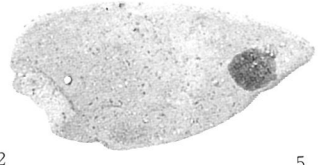
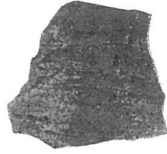
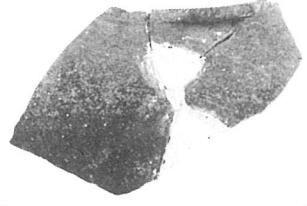
北西壁断面 (T.P.-5.0m~-4.0m付近)



全景（南東から）



第1C層・第2層出土遺物





18



10



11



13



16



17



22



24



21



26



27



28



34



41



42



44



45



39



40



38



46



47



(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第17輯  
都市計画道路貝塚中央線建設に伴う

## 脇 浜 遺 跡 II

—発掘調査報告書—

昭和63年 3月31日発行

編集・発行 財団法人 大阪府埋蔵文化財協会  
大阪市東区谷町2丁目36番地大手前ウサミビル

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

